



未來日記



秋華

あんパンが食べたい

つまらない。

毎日がつまらない。

楽しい事なんて何もない。

それなのに生きている事が、自分自身不思議だ。

死ねない理由は二つ。

一つは両親が悲しむから。

それが無ければ、はっきり言って死んでも良いと思ってる。

だけど、自分で死ぬのは怖い。

これが二つ目の理由だ。

だから俺は死ねないでいるわけだけど、正直生きているとも言えない。

何故なら俺は毎日、何もせずに過ごしているから。

世間ではニートと俺の事を言うらしい。

ニート？

格好いいじゃないか。

横文字だよ、横文字。

そんな格好いいニートから、俺は今日脱退する事を強要された。

「もうすぐ二十歳なんだから、自立しやがれこんちくしょう！」

なんて母親に言われてしまったのだ。

あんなに泣いている母親を見たのは初めてだったから、俺は動揺した。

そして言ってしまったんだ。

「おう！出て行ってやるよこんな家！バーカ！」って。

そして俺は家を出て、今久しぶりに外というか表を歩いている訳だ。

まあ2年ほど前までは、一応毎日学校に通っていたわけだから、道は覚えているし、社会ルールもおそらくわかる。

これだけわかれば、たぶん2日くらいは意地をはれるだろう。

さて、今日の夜を過ごす公園でも探そうか。

って、それよりも腹が減ってきた。

家を飛び出して既に6時間、何も食ってねえー！

もうダメだ。

とりあえずそこのベンチに座ろう。

ああ、俺はこのまま死ぬんだろうか。

歩けないし腹減るし、目の前には小さな魔法使いがいるし、間違いなく死ぬな。

俺は横になって目をとじる。

はあ～眠い。

誰か？「おーい！あんさん、私が見えるのかね？今目が合ったよね？」

なんだろう？

すぐ近くで女の子の声が聞こえる。

もしかして死神って、女の子なのかな？

てか俺、日頃の行いいいから、きっと天使だな。

うー眠。

誰か？「だから、あんさん、私は死神でもなければ、天使でもないのだよ。起きてみてください。」

なんだ？

死神でも天使でも無い？

じゃあ一体なんだよ。

今日の朝飯残したから、もったいないお化けでも出たか？

誰か？「だから目をあけて私をみてよ！こんな可愛いお化けがいるわけ無いデソ！」

全く五月蠅いなあ～

ベンチで横になっている俺は、しかたなく目をあけた。

すると俺の顔のすぐ前に、ミニスカートの小さい女の子。

てかいかにも魔女。

まあこの角度で見ると、小さなスカートの中が丸見えなわけで。

うーむ。

宗司「白だな。」

俺は色を指摘した。

まあやっぱり下着は白が一番だと思うのは、俺だけだろうか。

魔女？「うわあ～！何？何が白いのよ！」

魔女っぽい小さい女の子は、後ろの空中に飛び退いて、そのままの場所でスカートを押さえていた。

どう見ても、飛んでるよな。

俺は眠い目をこすりながら起きあがり、空中に停止している魔女っぽい女の子を見る。

魔女？「な、なに？」

宗司「小さい。」

魔女？「えっ！？」

そうなんだ。

女の子だから小さいのはわかるけど、明らかに俺のキャパを越えて小さいのだけれど。

キャパを越えているのに小さいって、なんだか言葉としてはおかしい気がするけれど、この場合、俺の理解を超えていると考える欲しい。

まあとにかく、普通の人間にはあるまじき小ささだ。

宗司「ふむ。」

俺はその魔女っぽい女の子のサイズを、指を使って計ってみる。

魔女？「変なところはさわらないでね。」

少し照れているらしい魔女っぽい女の子が、とても可愛いのですが、テイクアウトしてもよろしいでしょうか？

サイズは約5cm、ジャンガリアンハムスターくらいですかね？

わからない。

こんな小さな女の子の生き物なんて、俺のスーパーコンピュータには未登録だ。

これはいかん。

ちゃんと登録しないと。

宗司「なあ、君はなんて生き物？」

人間語が通用するかどうかは、先ほど何となく話したところでわかっている。

つまり通用するはずだ。

魔女？「んー宇宙人？」

ふむ。

そうか。

だから空も飛べるんだ。

納得納得。

宗司「じゃあ、名前は？」

魔女？「それで納得するんだ？別にいいけど。名前は・・・みかん。」

んー、美味しそうには見えないけど、本人がみかんだと言うんだから、きっとそうなのだろう。

つうことは、これは宇宙みかんって事だな。

これはきっと、神が俺に与えたもうた今日の食料。

感謝していただく。

俺は空を飛ぶ宇宙みかんをつかんだ。

みかん「痛いいたいよー！はなしてー！」

これを食べる？

なんとなく罪悪感があるんだけど、きっとこれは鶏を食べるのと同じだ。

宗司「あーん！」

俺は宇宙みかんを口に入れた。

みかん「なにしとんじゃわれー！！」

ポッフ！

口の中で宇宙みかんが爆発して、口から飛び出してきた。

宗司「あれ？俺は一体何をしてたんだ？」

なんだか寝ぼけていたようなんだけど、目が覚めたぞ？

みかん「あの一？」

宗司「うわー！！お前なんだ？！」

みかん「だから、みかんだって言ってるよ。」

宗司「いや、どう見てもみかんじゃ無いし。」

さっきのは夢ではないようだ。

みかん「だから、私はあなたがたの言葉で言うと、UMAとか未確認生物とか、そんな感じなわけよ。わかる？」

宗司「まあ、見たこと無いし、未確認生物と言われればそうだけど、問題は何故俺に話かけてるんだって事だよ。」

そうそう、話しかけてきたのは、その、みかんだ。

だからきっと、みかんは俺に用があるに違いない。

みかん「んー、用って言うか、私が見えるんだよね？」

そらさっきからつかんだり食べたりしてるわけだから、もちろん見えるだろう。

俺は頷く。

みかん「だから、私のご主人様は、あなたに決定したわけなのさ。」

宗司「ふむ。俺がご主人様か。では、これからは俺に仕える、そう考えていいのか？」
なにやら怪しいにおいがしてきたぞ。

ふっふっふ！

みかん「仕えるって言うか、監視？かな。」

・・・

それは却下だな。

宗司「監視禁止。何故にみかんに見張られにゃならんのだ？」

監視されるいわれはない。

みかん「そうそう、渡すの忘れてたね。これこれ。」

みかんはそう言いながら、一冊のノートを取り出した。

って、そんなでかい物を何処から出したんだ？

みかん「ところであなた、名前なんて言うの？」

宗司「尾北宗司だけど？」

新撰組の彼と同じ読みだけど、漢字は全く違う。

みかん「ふむふむ。尾北宗司ね・・・」

みかんはそう言いながら、ノートの後ろに名前を書いた。

漢字を言ってないのに、すぐに書ける奴なんて初めて見た。

宗司「なんで漢字がわかった？」

みかん「ご主人様の心は読めるからね。」
だったら、俺に名前を聞く必要がどこにあったんだろう。
みかんは俺にそのノートを渡してくる。
俺は受け取る。

みかん「契約成立ね。」

宗司「何が契約成立なんだ？ノートなんか買わんぞ！」

みかん「違うよ。お金じゃなく、未来を貰うから。」

未来？

どういう事だ？

宗司「意味がわからんぞ！わかりやすく申せ！」

みかん「そのノートに書いた事は、現実になる。それを達成したら、私にエネルギーが供給されるわけなのさ。」

うーむ。

よくわからんが、昔漫画で読んだウイングマンのドリムノートみたいなもんか？

宗司「じゃあココに、隣の五月蠅いババア死ぬって書いたら死ぬのか？」

みかん「死ぬね。」

もしかして、デスノート？

いや、そんなもの貰っても、俺は神にもなれないし、エルにも勝てないぞ？

しかし、この魔女ッ子が嘘を言っている可能性もある。

宗司「試してみていいか？」

一応聞いてみる。

笑顔で頷く。

うむ、魔女ッ子のくせして微妙に可愛いじゃねえか。

俺は書くためにノートを開く。

・・・

ペンが無い事に気がついた。

ドリムノートなら、ドリムペンがあったような・・・

宗司「おい！ペンは無いのか？」

聞いてみた。

みかん「仕方ないなあ。今日だけだぞ。」

みかんはそう言うと、何処からともなくペンを取り出す。

百円ショップで、五本セットで売っているボールペンだ。

まあ、こんな安っぽいノートにはお似合いのペンだな。

俺は、ページの最初に、「あんパンが食べたい」と書いた。

別に何も起こらない。

宗司「何もおこらんぞ？」

俺はみかんを睨む。

みかん「それは、日記だよ？食べたいって書いても、食べたくなるだけなのさ。」

ふむ、なるほど。

そう言えば、別に何でもいいから食べたいと思っていた食べ物が、あんパンでなくては納得いかない気持ちになっている。

これは意地でもあんパンを食べるぞ。

今度は、「俺はあんパンを食べる」と書いた。

何も起こらない。

宗司「どういう事だ？何も起こらんぞ？」

俺はみかんをこづく。

みかん「痛いよもう。えっと、そのノートは、1ページで一回になってて、最初に書いてもあまり意味がないのさ。」

宗司「そういう事は最初に言え！」

俺は再びノートの真ん中に、「俺はあんパンを食べる」と書いた。

すると少しして、あんパンを食べると書いたところまで、文字が埋めてゆく。

宗司「なっ！なんだ？」

みかん「あんパンを食べるまでの行動が出てきたね。それをその通り行動する事で、あんパンを食べる事が実行可能になるのさ。」

ややこしいノートだ。

みかん「まあ何かの希望を叶える為には、それ相応の苦労が必要って事。でもやれば確実に叶うから、無駄な努力はしなくてすむのだ。」

なんだか偉そうに話すな。

まあいい。

少し面白そうだ。

宗司「何々？公園を出た俺は、商店街に向かって歩く。商店街入り口で、転けそうになる老人をかばい自分が転ける。

その時、自動販売機の下の100円をみつけ拾う。そのままコンビニに入りあんパンを購入。俺はあんパンを食べる。」

微妙な感じだが、何か良いことをしろって事だろうか？

まあいい、俺はあんパンが食べたいのだ。

やるしかないだろう。

俺は公園を出て商店街を目指した。

後ろからみかんが飛んできてきていたが、まあほうっておこう。

商店街が見えてきた。

さて、老人はどこだろう？

いないな。

まあいい。

どこかにきっと隠れてるんだらう。

俺はかまわず歩く。

すると商店街入り口のところの建物から、老人がでてきた。

そしてすぐ転けそうになる。

宗司「あっ！危ない！」

俺のからだは勝手に反応していた。

・・・

老人は転ける事なく、そのままスタスタ歩いていった。

なんだ？助けるんじゃないのか？

みかん「ちゃんと助かったよ。宗司がいなかったら、きっと転けてたのだ。」

ふーん、そうなんだ。

宗司「おっ！100円落ちてる！ラッキー！！って、ノートに書いてあったとおりじゃん。」

俺は100円を拾って立ち上がった。

みかん「後はコンビニに入って、あんパンを買うだけだね。」

なんだか、微妙なノートだけど、一応ノートに書いた事が本当になるんだな。

宗司「ちなみに、この100円を警察に届けたらどうなるんだ？」

まあ、きっとあんパンは食べられないんだらうけど。

みかん「日記どおりに行動出来なかった場合、基本的にはその後の事は無効だね。でも、先に望みを叶える場合もあるから、その場合はつらい事が強制されるよ。」

なるほど。

って事は、最初にあまり大きな事を書いてはいけないって事だな。

グー・・・お腹が鳴った。

やたらとあんパンが食べたくなってきた。

宗司「くっ！あんパンが恋しくなってきた。」

俺はすぐ近くにあったコンビニに入った。

あんパンを探す。

あった。

俺はあんパンを一つつかんで、レジにもっていった。

あんパンと一緒に、さっき拾った100円を出す。

レジの人「このままでよろしいですか？」

いちいち五月蠅い奴だ。

そんな事は聞かずに勝手にやってくれ。

宗司「ああ、このままでよろしいですよ。」

ほら、日本語が変になってしまったじゃないか。

俺は今すぐ食いたいんだよ。

あんパンの袋にシールをはられ、そのまま差し出された。

なんだかあんパンが、超豪華料理に見えてくるんですが。

俺は大事にあんパンを手にとると、コンビニを出た。

外では魔女っ子みかんが空中で待っていた。

みかん「後は食べるだけなのさ。」

・・・

宗司「やらんぞ！」

みかん「ふ、ふん！いらぬモン。」

俺は袋を開けて、あんパンにかじりついた。

宗司「う、う、うんめえ～！ホントはみかんも食いたいんだろ？」

みかん「うー・・・」

なんだこの美味さは。

味を説明したら、パンとゴマとあんこの味なんだけど、メチャメチャ美味しい。

もしかして、これがいつも我が母君が言っているあれなのだろうか？

「自分で稼いだお金で飯食べやがれ！」って、いつも言ってるもんな。

この感動を俺に知ってもらう為に、あんな憎まれ口を・・・

ありがとう、母さん。

みかん「あのお～。感動中悪いんですけど～、私にも少しくれませんか？」

みかんがあんパンを食いたいと？

さっきいらぬとか言っていたような気もするが、今俺は母の愛に感動している。

苦しゅうないぞ。

それに上目遣いのみかんが、微妙に可愛いから、俺はあんパンを目の前の魔女っ子につきだした。

宗司「ほら、食べよ。」

みかん「わーい！」

みかんは子供のようにあんパンにかぶりつく。

まあ、子供だから子供のように当然なんだけどな。

顔にいっぱいあんこをつけて食べる姿が可愛い。

うむうむ、なんだか泣けてきた。

ん？なんだ？

俺はふと周りを見た。

通りすがりのおばちゃん「さっきからあんパンに話かけてるのよ。」

立ち止まるおばちゃん「可哀相に。まだ若いのに。」

犬「く～ん・・・」

なんだ？どうした？

俺があんパンに話しかけてる？

通りすがらなかったおばちゃん「それにさっき、みかんも食べたいって。」

立ち止まりまくるおばちゃん「そうとう悲しい食生活なのね。」

犬「く～ん・・・」

もしかして、この魔女ッ子が見えない？

あら、そう言えばさっき公園で、私が見えるからご主人様とかなんとか言ってたような。

俺は、あんパンを食べるみかんに顔を近づける。

宗司「おい、お前って、他の人からは見えないんだっけ？」

俺はできるだけ小さな声で聞いた。

みかん「う、うん。じえんじえん見えないよ。全く見えないよ。しかも触る事も感じる事も無いよ。」

てことは、こいつと人前で喋ると、俺は危ない人になってしまうって事か？

通り過ぎようとしていたけど、止まったおばちゃん「あら、今度はあんパンにささやいてるよ。」

座り込むおばちゃん「愛の告白の練習でもしてるのかしら？」

犬「く～ん・・・」

てか、犬の鳴き声は、何か意味があるのか？

とにかくこのままではやばい。

戦線離脱だ。

宗司「うお————！！！！」

みかん「きゃああ！急にどうしたのさ！」

俺は風になった。

とにかく商店街から離れた。

戻ってきてた、公園に。

宗司「ふう～！」

俺はさっき座っていたベンチに再び座る。

みかん「つか、どうしたのさ？急に走り出して。」

んー・・・どうしたんだろう？

宗司「俺とお前が話してるところを、他の人が見たら、どう思うと思う？」

さっきのおばちゃん達は、独り言を喋る変な青年とでも思っていたように見えたが。

みかん「んー。嫌らしい目で、可愛い女の子をくどくおっさん？」

そんな風に見られるのか？

それはひどい。

宗司「でも、お前の事、他の人は見えないんだよな。」

みかん「だね。」

良かった～

最悪の結論だけは免れた。

宗司「じゃあ、あんパンに話しかける可哀相な人に見えるって事か？」

みかん「あー！あんパンもっとちょうだい！」

俺は手に持ったままの、半分くらいになってるあんパンを差し出した。

みかんは再び美味しそうに食べ始めた。

ふむ。

なんかどうでも良くなってきた。

とりあえず、こいつと話す時は、誰かの視線を気にする事にしよう。

俺は残りのあんパンを、みかんと一緒に食べた。

なんで俺、こんな不思議な奴と普通に馴染んでるんだ？なんて思いもしたが、まあ可愛いしいいか。

結局夜10時には家に帰った。

両親には軽く嫌みを言われたが、今日は機嫌が良かったから、別になんとも思わなかった。

むしろニヤニヤしている俺を見て、両親が不快な気持ちになったようで、嫌みも軽かった。

日付が変わる頃、みかんと一緒に布団に入って寝た。

もちろん抱きしめて。

みかん「んなわけあるかぁ！！適当に机の上にポイツとかしやがって、怒畜生だよ！」
勝手に俺の心の日記、読まないでくれる？

100万円拾う

俺はニートだ！

だから、今日が何月何日で、何曜日かもわからない。

まあ、毎日が日曜日ってやつ？

いやー愉快愉快。

みかん「なー。日記になんか書いてよー。でないとな私のエナジーたまらないんだけどさ。」

寝ればこの小さな魔女っ子も、夢だったって感じでいなくなるかと思いきや、ちゃっかし机の上にいる。

まあ、この魔女っ子は嫌いではないし、別にいても差し支えない。

少し、エロビデオを鑑賞する時に恥ずかしいような気がするだけだ。

食費も俺の飯の1/10000程度を与えてやるだけで事足りる。

問題は、このノートに日記を書くって事だ。

俺はノートを見つめる。

ただのノートだ。

とても何らかの力が備わっているとは思えない。

しかし昨日の事が夢でないなら、このノートは結構凄いノートだ。

ドリームノートやデスノートには負けるけど、ある意味俺好みかも。

宗司「なあ、これに100万円拾ったって書いたら、俺は拾うんだよな？」

みかん「うん。拾うよ。」

宗司「だったら俺、簡単に金持ちになるんじゃないか？」

多少何か試練があったとしても、おそらくできない事なんて要求してこないでしょ？

みかん「簡単かどうかは、書き方によるのさ。たとえばページの最初に書いても、それは自力で探すしかなくなる。」

宗司「ああ、それは昨日のでわかるよ。」

みかん「もし、最後に書いたら、詳細が事細かに書かれて、最後にそれが達成される。でも、沢山の事をしなければならぬかもしれない。」

なるほど。

宗司「だったら、真ん中くらいに書けば、要求も少なく、やることも、ある程度具体的にわかって良いって事かな？」

みかん「まあ、書いてみたらわかるけど、書いた事の後に行動が書かれる事もあるのさ。」

ふむ。

とにかく使って試せて事か。

面倒くさいけど、面白そうではあるし、まあ、使ってやるか。

宗司「よし、それならちょっと書いてみよう。」

みかん「いやっほ〜い！！」

みかんが机の上で踊っている。

くっ！ちょっと可愛い。

俺はなんとなくノートに書いた。

ページの真ん中に、「100万円拾った」と・・・

少しすると、ページに文字が書かれてゆく。

これを見るのは二度目だけど、昨日見た時より不思議な感じだ。

昨日は半分寝ていたような気分だったからな。

今日はさっき起きて、朝昼兼用の飯を食ったばかり。

どうやら書き終わったようだ。

読んでみる。

「俺は散歩に出た。昨日行った公園に行きたくなったからだ。天気はとても良い。緑の葉っぱが必至に光合成しているようだ。」

・・・

なんだこれは？

無駄な事がやたらと書いてあるように見えるけど？

ああ、空白を無理矢理埋めているのか。

再び続きを読む。

「すれ違う犬、昨日見た犬。ああ犬。くーん！」

て、ホントに無駄だな。

「もうすぐ公園だ。見えてきた。公園だ。公園についたんだ！俺はやったぞ！！冒険は終わった。その時！！！！ダダダン！！」

・・・

もうやめようかな。

「昨日のベンチの上に、鞆が置いてあるのに気がつく。俺は走ってかけより、鞆をつかみ、懐に抱き寄せる。辺りを見回し、誰もいない事を確認。中身を確認した。」

おお、これが100万円か？

「猫だ・・・猫が入っていた・・・」

おいおい、なんだよ。

サクッとゲットさせてくれ。

「ん？鞆の底、猫の下に敷き詰められた紙、万札じゃね？俺は紙を全て鞆から出す。もちろん猫はそのままだ。」

ああ、面倒くせー！

「札の数は丁度100枚。100万円拾ったようだ。」

おおすげえ！！

「しかし俺は、こんなお金を今までに持った事がない。怖くなった。つーか、拾ったら警察に届けな」と。」

なんだ？続き？

しかも警察に届けるだあ？

俺はなんてチキンなんだ。

持っていくんじゃない！！

「鞆にお金を戻すと、俺は交番を目指す。交番の前まで来た。俺の認識では、交番は怖い所だ。チキンな俺は、交番の前に鞆を置くと、家まで走って逃げ帰った。」

・・・

これじゃあ、結局100万円はもらえないじゃん。

宗司「おい、これ行動しても、何も意味無いような気がするんだけど？」

みかん「書いた事は実現するのだ。」

宗司「でも、無駄足じゃん？疲れるだけじゃん？」

みかん「私にエネルギーが入ればそれでいいのさ。」

・・・

寝よう。

俺は横になった。

みかん「ああ、そう言わずにさ、行こうよ公園。私いきたいなあ。」

みかんが近くにきて、目をウルウルさせている。

くっ！なんだか昨日の公園に行きたくなってきた。

つーか、一応100万円拾うんだよな。

その後うまくやれば、貰えるなんて事も。

てか、ちゃんと交番に届ければ20%まで要求できるとか聞いた事あるぞ？

宗司「ああ！わかった。わかったから。」

みかん「わーい！」

むむむ、なんて可愛いのだ。

反則ですな。

俺は起きあがると、みかんを肩に乗せて家を出た。

飛べるから、肩に乗せなくても良いような気もするけど、なんかこの方が、俺がかっこよく見えない？

宗司「ああー天気いいなあー」

いい季候だ。

春か秋か。

ああ、あそこの葉っぱが必至に光合成してるから、今は春から夏に向かってるところか。

犬「くーん！」

・・・昨日の犬だな。

尻尾振ってやがるよ。

犬だからな。

宗司「バイバイ犬！」

俺は犬とすれ違う。

さて、もうすぐ公園だ。

見えてきた。

ふふふ、もうすぐ公園だぜ！

宗司「よっしゃー公園だあ！！」

・・・って、なんで俺はこんなに喜んでるんだ？

って

宗司「うわ！マジでベンチの上に鞆が置いてあるよ！」

みかん「ココまで順調だね。」

宗司「そんな落ち着いてる場合かよ！」

俺は慌ててベンチに駆け寄り、鞆を胸元に抱き寄せた。

周りを警戒したが、誰もいない。

鞆「ニャーニャー！」

宗司「にゃーにゃーだと？ああ、そういや猫が入ってるんだっけ？」

俺は鞆を開けた。

猫がいた。

ちょっとむかつく顔してやがるな。

まあいい。

金金っと。

宗司「おおおおお！！！！マジで一万円だあ！！！！」

ととととと。

やばいやばい興奮してきた。

ん？

俺はココで、数を数える事になっているはずだ。

そして鞆に入っているのは、合計100万円である事を知るんだ。

宗司「みかんよ。ココで俺が100万円数えなかったらどうなるんだ？」

もし、後の事が無効になるなら、俺は100万円ゲットのチャンスを得る事になる。

みかん「それ以降は無効だね。でもそれをすると、それ相応の試練が来るか、結局はメリット無しの状況になるはずだよ。」

うーむ試練か。

しかし100万円だけ？

多少の試練は受けて立とうじゃないか。

宗司「俺はこれを持って帰る！」

みかん「たぶん無駄に終わると思うのさ。」

宗司「俺は永遠のチャレンジャーなのだ！」

みかん「ニートなのにチャレンジャーね。」

宗司「うおー！！！！！」

俺は家に向かって走り出した。

誰か女「きゃあ！！」

・・・

宗司「いててて・・・」

いきなり誰かにぶつかった。

誰だよ全く。

俺は、いつの間にかとじていた目を開ける。

ん？この光景は・・・白だ・・・

誰か女「何処見てますの？」

おっと、素晴らしい物が見えていたから、つい見とれてしまった。

俺はその白いものから視線をあげた。

んー、時給1200円くらいかな。

少しきつそうな目してるけど、概ね可愛い女の子に見える。

頭も良さそうだし、覚えるのも早そうだ。

宗司「仕事覚えたら、時給1250円にするよ。」

誰か女「はあ？何言ってますの？」

女はそう言うと、自力で立ち上がって、スカートについた砂をはらった。

残念。

俺も立ち上がった。

すると女は、俺の抱えている鞆を見た。

宗司「しまっ・・・」

俺は言いかけて、鞆を後ろに回す。

誰か女「ああ、その鞆、届けてくださったの？」

宗司「いえ、猫なんて入ってませんよ。」

鞆「ニャーニャー」

鳴くんじゃありませんとの事よ。

誰か女「ありがとうございます。忘れ物を届けてくださって。」

宗司「いえいえ、そういう訳では。」

みかん「もう無駄だって。」

宗司「うるさい！」

誰か女「お、お礼を言っているのに、五月蠅いってどういう事ですか？！」

ココで逃げるか？

みかん「逃げたら犯罪だよ。」

宗司「くっ！」

俺は諦めた。

宗司「いえいえ、さっきから猫が五月蠅いなあって。はい、鞆、お返しします。」

誰か女「ええ、ありがとう。」

女は差し出した鞆を受け取ると、少し重そうに顔をゆがめて一瞥をくれた後、何事も無かったかのよ

うに、鞆を持って去っていった。

結局無駄骨かい。

みかん「それでもないよ。服、胸の辺り見てみるのさ。」

宗司「ん？」

服に、なんか臭い物が、うんこが、ついていた。

無駄骨ってか、踏んだり蹴ったり？

みかん「そのノートは、善意には易しく、悪意に厳しいのさ。」

・・・そういう事は、早く言って・・・

みかん「素直に交番に届ければ良かったのに・・・」

俺はトボトボと我が家に向かった。

みかんの友達

みかんが俺を睨んでいる。

これは俺に、ノート使えという無言の圧力だ。

昼過ぎに起きて飯を食った後、部屋に戻ってから10分、ずっとこの状況が続いている。

宗司「はあ〜。今日もなんか書いてみるか。」

みかん「宗司最後ー！！！！」

それを言うなら最高でしょ？

それともホントに最後なのか？

死ぬのか俺？

そう言えば、2日前まで俺は死にたいと思っていたんだよな。

でもなんだろう。

今はそんな気が全くしない。

宗司「みかん？」

みかん「うーん。早く〜！書いて書いて〜！」

・・・

可愛い。

こいつのおかげかな？

なんだか死ぬのが惜しくなってきたような気がする。

よし、ノート書くか。

で、何を書く？

欲望のままに書いても、それはどうせ達成されない気がする。

些細な事を書くか？

些細な事なら、自分で普通にできるよな。

てか、善意に優しく、悪意に厳しいとか言ってたな。

ココは自分の為じゃなく、誰かの為に使うってのがいいのかも。

でもさ、俺友達いないじゃん？

ニートじゃん？

そんな事言っても、誰にも俺の善意を与えられないじゃないか。

ふと、俺の目に入るのは、小さな魔女っ子みかん。

宗司「おまえさ、何か欲しい物とか望みとかあるか？」

俺はみかんに聞いてみた。

みかん「望み？んー、エネルギーくれ！」

ノートを書いてくれれば良いて事か？

それだとなんにもならないんだけど。

宗司「それ以外だと？」

みかん「遊ぼう！！」

・・・子供だ・・・

あっ！そうか。

よく考えたら、こいつはどう見ても子供。

まあ、このまま人間サイズになったら、子供ってよりも、中学生くらいの容姿っぽいけど、子供に必要なのは友達じゃないだろうか？

宗司「お前、仲間とかっているのか？」

みかん「仲間？」

宗司「ああ、お前と同じ、ちっこい魔女っ子がいるのかと聞いている。」

みかん「んー。いるんじゃないかな？見たことないけど。」

ほう、いるのか。

でも見たことが無い？

宗司「見たことないのに、どうしているってわかるんだ？」

みかん「この星にいるかどうかはわからないけど、いるのは確かなのさ。で、おそらくはこの星にも、いる確率はそこそこあるのだ。」

宗司「ふむ。じゃあ、誰かと一緒にこの星に来たわけではないのか。でもおそらくいるだろうと。」

みかん「うん。」

宗司「じゃあ、ココに魔女っ子に会うって書いたら、会えるのか？そしてみかんと友達になったって書いたら、友達になれるのか？」

やっぱり、友達って大切だよな。

俺友達いないから、凄く欲しいモン。

なんでも話せる友達が。

できれば女の子がいいけど。

みかん「宗司優しいのだ・・・」

みかんは目に涙を浮かべて感動していた。

しかし・・・

みかん「でも、無理だと思うのさ・・・」

みかんの顔はすぐに悲しそうな顔になった。

宗司「どうしてだ？ノートに書いたら、実現されるんだろ？」

悲しそうな顔を見ていたら、こっちも悲しくなってきた。

みかん「そうなんだけど、この星にいないと流石に無理なのさ。」

宗司「さっきいるっていったじゃん？」

いるって言ったのにいない？

どういう事だ？

みかん「おそらくいるけど、出会う事のできる魔女っ子がいないのさ。」

こいつ、自分で魔女っ子って言ってやがる。

ふふふ。

って、それはどうでもいいんだけど。

宗司「どうしてだ？」

いるのに会えない。

なんか悲しくなるだろが。

みかん「んー。一言で言うと、ノートを持つ人間同士が干渉しあえないように、魔女っ子同士ではお互いが見えなくなるの。もちろん人間の方からも。」

なるほど。

こんなノートを持つ奴が集まったら、何しでかすかわからないとでも言うのだろうか。

確かに、今俺一人だから何していいか思いつかないけど、沢山集まれば何かとんでもないことができてしまうかもしれない。

ん？さてよ。

でも、俺はこいつにノートを貰う前に出会ったわけで、もう一人同じように見えれば、そいつも俺の魔女っ子になるんじゃ？

宗司「ご主人様が決まってない魔女っ子に会っても見えないのか？」

みかん「ううん。見えるよ。でももう何日も経ってるし、ご主人様をみつけない魔女っ子なんて、いないと思う。」

見込みはほとんどないって事か。

でも、ゼロではないんだよな。

宗司「試してみて、いいか？」

おれは一応聞いてみた。

みかん「そんな事する人って、いるんだね。ご主人様の過去の歴史の中で、そんな事する人見たことないのだ。」

宗司「おお！俺って史上最初の人間になるのか。なんかかけえー！」

俺はノートに書き始めた。

魔女ッ子がいれば、見つけるのに、たいして手数が必要な気がしない。

それにこれは善意だ。

と思う。

俺はノートの二行目に、「俺はみかん以外の魔女ッ子に出会った」と書いた。

みかん「きっと、出会ったの後に、気分をあげたとか書かれちゃうのさ。」
なるほど。

無理な事を書いた時は、そんなふうにかわされるのか。

文字が書かれ始めた。

一行だけだったので、すぐにその行為は終わった。

なにに、「今日も俺は散歩に出る。すると公園で」書かれていたのはこれだけ。

その後に、俺が書いた、「俺はみかん以外の魔女ッ子に出会った」があるだけ。

みかん「えっ！？もしかして、まだ本当にご主人様が決まっていない魔女ッ子がいるの？てか、こんなに近くに？」

みかんが驚いている。

これはそうとう珍しい事なのだろう。

ってか、俺が初めてこんな事を書いたんだから、珍しいどころか初めてなんだろうけど。

宗司「まあ、そういう事だ。とりあえず公園、行ってみるか。」

俺は少しフリーズ状態のみかんを肩に乗せると、家を出た。

今日は犬とすれ違う事もなく、すぐに公園についた。

パッと見、魔女ッ子らしい姿はない。

宗司「小さいからな。」

俺はちょっと不安そうなみかんの頭を指でなでた。

みかんはちょっと嬉しそうにしていた。

ベンチまで来た。

しかし魔女ッ子らしい姿は見えない。

みかん「やっぱり、何かの間違いだったのかなあ〜」

少し、いやかなり、みかんは残念そうな顔をしていた。

宗司「そうあわてなさんな。ココで会うことになってるんだから、少し待ってみるべ。」

俺はベンチに座って、背もたれに体をあずけて上を見る。

ポコッ！

白だ。

何かが上から落ちてきた。

そして顔に乗かった。

おそらく、ベンチの上まで張り出している枝から落ちてきたのだろう。

もちろん、鳥の糞が落ちてきたわけではない。

なんせドキドキワクワクな白が見えたのだから。

魔女ッ子「あれ？どうしたんだろ？この人、私を通り抜けないよ？もしかして、ご主人様？」

ちょっと喜んでいるようだ。

良かった良かった。

でも、先に顔からおりてくれないかな？

ずっと白いのが見えてるんですけど。

みかん「・・・」

宗司「どうしたみかん。お前にも見えるのか？」

魔女ッ子「ええっ！もしかして、この方は、既に所有者になっちゃってる？」

俺の顔の上で立つ魔女ッ子の前に、みかんが立つ。

ってか、俺の顔の上で、なにしてんだこの野郎。

野郎じゃないな、白いのが二つ見えるもんな。

みかん「うん。こいつは私のなのさ。」

いや、別にみかんの持ち物になった覚えは無いぞ？

魔女ッ子「うーん。譲ってくれる気は？」

なんと、譲る事とかもできるんだ。

ってか、二人とも俺が面倒みる事はできないのか？

みかん「譲るなんて、できないのさ。」

魔女ッ子「だよね・・・」

魔女ッ子は俺の顔の上で、ガックリと座り込む。

白いのが見えなくなった。

宗司「てか、いつまでチミ達は、俺の顔の上にいるのかね？」

俺は二人を捕まえる。

みかん「うわああ！！」

魔女ッ子「きゃー！な、何を？」

暴れる二人を、二人？

まあいいや、二人をベンチの上に置いた。

二人とも、ちょこんと座ってこっちを見ていた。

・・・

可愛いよな。

俺はオタクではないけど、美少女フィギュアを集める方々の気持ちが、少し分かった気がした。

宗司「お前達、今日から友達な。」

俺は二人を、交互に指さす。

みかん「んー。ロボダッチ？」

宗司「いや、全然違うし。しかもなんでそんな古いもの知ってるんだ？」

魔女ッ子「あっ！勉強ロボ！」

宗司「ああいたね。って、お前もなんでそんなの知ってるんだ！？」

俺のツッコミは無視して、みかんと魔女ッ子は見つめ合っていた。

みかん「よろしくなのさ。」

魔女ッ子「うん。こちらこそ。」

うんうん、良かった良かった。

俺は、両肩に両魔女ッ子を乗せて、家路に向かっていった。

宗司「で、お前名前は？ああ、俺は尾北宗司だ。」

みかん「ああ！名前言っちゃった！」

どういう事だ？

宗司「名前言っちゃダメなのか？」

みかん「契約を成立させるには、名前を聞き出して、それをノートに書く事なんだよ！」

宗司「じゃあ二人とも俺に仕えればいじゃないか。」

みかん「ダメだよ。後から契約されちゃうと、先の人を追いつかれるのさ。きっと・・・」

・・・

きってのは、過去に実例がないからって事なんだろうけど。

魔女ッ子「そんな事しないよ。だって友達でしょ。」

魔女ッ子はニッコリと笑った。

みかん「うん。ありがとう。」

んー、俺としては、この子でも全く問題ないんだけどな。

みかん「うわーん。今、宗司が私を捨てようと思ったよー！」

宗司「いや、そんな事しないって、大丈夫だから、大丈夫。」

みかん「ほ、ほんと？」

宗司「ああ、この目を見てみる？な？」

・・・

今一信じられないか？

でも俺はみかんを捨てる気はないけどな。

みかんの顔が笑顔になった。

みかん「わーい！」

みかんが俺の顔に抱きついてきた。

宗司「顔に張り付くな。全く・・・」

通りすがりのお婆さんの顔が、不信感いっぱいだ。

やばい。

俺は顔のみかんを引き剥がすと、元の肩にのせて、黙って歩いた。

魔女ッ子「私は、ゆずっていいます。ヨロシクです。」

さっきの質問の答えだ。

みかん「あれ？名前教えても大丈夫だったっけ？」

ゆず「そう言えば、前例がないね。」

みかん「やっぱり私、追い出されちゃうのかな？うう・・・」

宗司「ああ！大丈夫だって。捨てたりしないし。」

俺はなんだかとても楽しかった。

数日前からは考えられないくらい、充実した時間をすごしている気がした。

だが、この後とんでもない事に巻き込まれる事になる。

この時の俺には、気づくよしもなかった。

ゆずの契約者と住まい

今日は朝っぱらから騒がしい。

昨日友達ができたからって、みかん、騒ぎすぎ。

この声も別に近所に聞こえているわけではないから、近所迷惑にはならないけど、俺迷惑だ。

ゆずも、みかんほどではないにしても、かなりはしゃいでいる。

まあ、話を聞いたところによると、みかんよりも早い時期から、地球にいたらしい。

どこから来たのかは、全くわからないけど。

まだ、あの萌え系芸能人が言ってるコリン星の方が信じられる。

みかん達の話によれば、宇宙は無限にあって、それは宇宙の中に存在する。

俺の体の細胞の一つ一つにも宇宙があるとか。

でまあ、地球に住む誰かの中の宇宙から来たらしいんだけど、理解もできないのに、信じられるかっての。

それでもこの二人の存在を、普通に受け入れてるんだけどね。

みかん「へえー！犬の中の宇宙から来たんだ。」

ゆず「そうなんだ。結構田舎の宇宙だけど、気楽で良いよ。」

意味がわからない。

つーか五月蠅い。

宗司「はあ〜」

俺はため息がでた。

朝から幸せが一つ逃げてしまっただろが。

俺は仕方なく布団からでた。

今日はもう、これ以上眠れないだろう。

みかん「あれ？宗司今日は起きるのが早いのだ。」

ゆず「宗司さん、おはようです。もしかして起こしちゃった？」

うーん。

やっぱりみかんを捨てて、ゆずに乗り換えた方が、俺の為ではなかろうか。

みかん「あー！また宗司がひどいこと考えてるー！うわーん！」

宗司「あっ！大丈夫だって。考えてるだけで実行しないから。」

みかん「わーん！やっぱり考えてるんだあー！」

てか、この可愛いのを捨てられるわけないだろうが。

全く・・・

みかん「あ・・・可愛い？てへへ・・・」

てか、本当に心読まれてるな。

しかも100%だ。

まあ別に読まれて困る思考はないけど。

宗司「よし、それじゃ、せっかく早起きしたし、朝飯食いにいくぞ！」

俺は自室を出て、居間に向かった。

居間に入ると、両親が朝の食事をしていた。

母上「どうしたの宗司、こんなに早く起きて。飯なんか用意してないよ。」

父上「かあさん、それは可哀相だろう。パンの耳くらいやったらどうだ？」

母上「甘やかしたらダメなの。息子がニートだなんて、私恥ずかしくて言えない・・・」

父上「確かにな。よし、自立してもらうために、今日から小遣いも無しだ！」

母上「良い考えね。じゃあそのお金で、私に何か買って。」

父上「よしよし、うまい棒か、チロルチョコか、それともチュッパチャップスか？」

母上「ああん。うれしい――！！」

俺は、無言で居間から出た。

もうこの家には、俺の居場所はないのだと悟った。

自室に戻った俺は、ひとまず空腹は我慢して、今日もノートを使う事にした。

みかん「ねね、今日は何書くのさ？」

ゆず「いいなあー。私も早くご主人様を見つけたい。」

宗司「うん。それだ！なあみかん、1ページに二つ同時に書く事は可能か？」

俺は今日かなえたい事が二つある。

無理なら一つは明日でも良いのだけれど、善意と欲望を同時に書いた方が、叶いやすそうだから。

みかん「書けるよ。でも、話の流れに無理があったりしたら、うまくいかないよ。」

宗司「そっか。」

俺はみかんの返事を聞いて、ノートに未来日記を書き始めた。

まずはページの真ん中に、「ゆずのご主人様が見つかった。良かった。」と。

ゆず「うわあ。あ、ありがとう。」

ゆずの目に少し光るものがあった。

俺は続けてページの最後に未来を記す。

「ココが俺の新たな生活の場所だ。両親の元を離れて生活するのははじめてだけど、頑張ってる生きてゆこう。」

そう書いた。

みかん「ココから出たいの？」

みかんがあどけない顔で聞いてきた。

宗司「別にココが嫌なわけじゃないけど、両親にずっと迷惑かけられないからな。」

ゆず「おお、えらいです！自立するわけだね。」

みかん「朝飯食わせてもらえなかったから、すねてるだけけどね。」

心読むのやめてよね。

ノートを見ると、今日の日記が書き上がってゆく。

果たして、うまくいきそうな物が書かれるのだろうか。

書き上がった。

「俺は家に戻るつもりはなかった。だからなるべく遠くに行こう、そう思って駅を目指す。名残惜しむように街を見て歩く。歩いていて気がついた。

俺は働かないと独り立ちできないのではと。なら、住み込みで働ける所を探そう。キョロキョロとしながら歩いていると、死の交差点に来た。

ココは、見通しが悪くてよく事故がおきる交差点だ。そんな事を考えていたら、うしろから何かがつぶつてきた。俺は前方、道路へと飛ばされた。

ココは道路の真ん中で、車がすぐ近くまで来ていた。気がついたら、俺はどこかの部屋で寝ていた。横には心配そうに俺をみる女の子。

ゆずがその女の子の肩に座っていた。ああ、ゆずのご主人様が見つかった。良かった。」

ふむ。

なかなか凄い展開だな。

俺はこれからあの交差点に行って、何かにぶつけられて道路に放り出され、車にひかれると。

おいおい、そんな事知ってて、そのとうりにするのって、メチャクチャ怖くないか？

死なないとわかっていても、ジェットコースターが怖いような感じ？

いや、それ以上にこわいだろう。

つか、絶対痛いだろうし。

とりあえず続きを読もう。

「安心して、再び俺は眠りにつく。目が覚めた時、既に外は暗くなっているようだった。部屋の明かり

がまぶしい。つーかシャンデリア？やたら高そうなやつ。

俺が体を起こすと、みかんが俺の胸の辺りから、膝の上に落ちた。良かったーなんて泣いていた。どうやら心配してくれていたようだ。ちょっと嬉しい。

少し落ち着き、部屋を見渡した。なんだかやけに豪華な部屋だ。部屋にさっき見た女の子が入ってきた。話を聞くと、どうやら俺は、車にはねられたらしい。

この子がぶつかって来たのが原因だ。女の子は、俺の事を命の恩人だといった。俺にぶつからなかったら、死んでたと。そして是非お礼がしたいと。

ココにおいてほしいって言ったら、あっさり了解された。ココが俺の新たな生活の場所だ。両親の元を離れて生活するのははじめてだけど、頑張ってるよ。

ほう。

二つがつながる形でうまく達成されている。

いや、かなり強引だけど。

割と簡単な感じがするけど、こんなんでも本当に住まわせてもらえるのだろうか？

辛いのはやはり車にひかれる事か。

怖いよー！

まあそうも言ってもらえないので、俺は必要な物を持って家を出た。

車にひかれるから、壊れそうな物はもたない。

ためていた少しのお金とか財布とか。

携帯電話は置いていくか。

親に、解約するように書いて、机の上に置いておいた。

さて、家をでるのだから、なるべく遠くに行こう。

だからまあとりあえず駅だな。

持ってる金で、何処までいけるか・・・

って、俺なんでこんな事考えているんだ？

死の交差点に行けば良いだけなのに。

とにかく向かう。

みかん「大丈夫か？ギリギリで怖くなって逃げると予想するのだ。」

ゆず「うー、でも頑張ってるよ。」

なんだ？

なんか車にひかれて欲しいって、微妙にやな感じがするんですけど。

しかし、ホントにこの景色を見る事はもうないのだろうか？

なんだか名残惜しい。

つーか、住まわしてくれるってなってるけど、やっぱ働かないとな。

日記で見たところ金持ちそうだったから、お手伝いとかでやとってくれねえかな。

さてそろそろなのかな？

俺はキョロキョロと周りを見る。

なんか微妙に日記と違うけど、誤差内なのだろうか。

さあいよいよ、死の交差点だ。

誰か女の声「遅刻、遅刻ですう～！」

ん？

誰か後ろから・・・

ドン！

宗司「うわあ！！」

俺はゴロゴロ転がって、道路に体を横たえた。

キーーーーーっ！！！！ドン！

死ぬほどいてえ・・・意識がとぎれた。

夢なのだろうか。
少しだけ目が覚めた。
まだ意識はもうろうとしている。
しかし、俺の目には確かに見えた。
俺より少し歳下だろうか、高校の制服を着た女の子と、その肩に座るゆず。
良かった。
見つかったんだ。
ココまでは順調だな。
俺は再び眠りについた。

俺は目が覚めた。
どこだかわからない部屋。
シャンデリアがやたらまぶしい。
どうやらもう夜のようにだ。
俺は目を半分だけ開けて、体を起こした。

宗司「ん？」

みかんが布団の上で寝ていたようで、コロコロところがって、俺の股間の辺りで止まった。
んー、微妙。

みかん「あー！宗司ー！生きてたー！！良かったよ〜！」

みかんが涙を流しながら、俺の股間の上で飛び跳ねる。

布団の上からとはいえ、ちょっと痛いつて言うか、気持ちが良いんですが。

宗司「まあまあ、落ち着けみかん。これは日記どおりじゃないか。」

俺はこのまま飛び跳ねられるのもやばいので、みかんを捕まえた。

みかん「そだけど、やっぱり怖かったのさ。」

ホントに心配してくれてたんだな。

嬉しい。

しかし、それよりもココは何処だろう。

部屋はやけに豪華な部屋だな。

入り口を見た時、さっきみた女の子が、部屋に入ってきた。

肩にはゆずが乗っている。

服はさっき見た制服ではなく、既に私服に着替えていた。

女の子「あっ！目がさめましたかあ〜？良かったですう〜」

そういつて駆け寄ってきた女の子。

あっ！

女の子「びあ！」

転けた・・・

ドジッ子？

この子に突き飛ばされたのか。

宗司「大丈夫？」

俺はベットから降りて、手を差し出す。

宗司「って、いててて」

頭がやたら痛い。

頭を触ると、包帯と包帯ネットで固められていた。

・・・

女の子「ああ、だめですう〜！さっき、さっき、車にはねられた時、血が噴水のように噴き出してた

んだからあ～！ひっく・・・」

女の子が泣いていた。

どうやら相当やばい状態だったんじゃないだろうか？

いくらこのノートの力といえど、車にはねられたら普通やばいもんな。

宗司「ああ、大丈夫だから泣かないで。えっと・・・」

名前知らなかった。

宗司「俺、尾北宗司って言うんだ。君の名前は？」

女の子が俯いていた顔を上げて俺を見る。

泣いた後の上目遣い。

これはやばいだろ。

反則って言うか可愛い。

この子、ちゃんとみたら、メチャクチャ可愛い子じゃないか。

女の子「宗司さんですよ。知ってますう～！屋上の尾北ですう～！わーん！」

また泣き出した。

ってか、屋上の尾北って何？

あっ！そう言えば、さっきちょっとだけ見た制服、あれ、俺の卒業した高校の制服じゃん。

て事は、知っててもおかしくないけど、俺はしらんぞ？

とりあえず、泣きやむのを待った。

華「河崎華です。命を助けてくれてありがとうございますう～。もしあそこに宗司さんがいなかったら、私死んでました。」

宗司「ああ、華ちゃんって言うんだ。でも、俺は別に何もしてないし、命助けた訳じゃなから。」
あれ？

ココはそうだと行って、見返りを求めなくちゃいけないんだっけ？

華「そんな事ありません。それに、少なくとも私のせいで、怪我させてしまったのですう～。」

宗司「まあ、そうだけど。」

華「だから、お礼とお詫びになにかしたいのですがあ～？」

宗司「えっ？いや、そんな、大丈夫だよ。」

やべ。

つい普通に対応しちまった。

本当はココで、ココに住まわせてくれって言わないといけないのに。

華「では、何かできるまで、ココにいてほしいですう～。」

・・・

宗司「ココに住んで良いつて事？」

華「そうなるんじゃないかなあ～？」

何で疑問系やねん。

でもこれで、二つの望みが叶ったって事だよな。

宗司「あれ？ゆずはどうなったんだ？」

華の肩にすわるゆずに話しかけた。

ゆず「ええ？私がみえるの？もう華と契約成立したのに？」

華「契約して、ノート頂いちゃいましたあ～」

華は嬉しそうに、名前入りのショボイノートを俺に見せた。

みかん「先に出会ったから、干渉制限がかからなかったのかも。」

俺の手の中にいたみかんが、顔を出した。

華「あら可愛い。宗司さんが車にひかれた時にいた、魔女ッ子さんですねえ～」

宗司「えっ？華ちゃん、これが見えるのか？」

俺はみかんをつまんで、華ちゃんの目の前にかざした。

みかん「われえー！なんたる扱いしてくさるんじゃあ！」

華「そんな言葉使いは、女の子がしっちゃ駄目だよお〜」

どうやら、見えているし、聞こえているようだ。

出会いと契約のタイミング。

それによっては、ノートを持つ者同士の干渉が可能らしい。

まあ全てはうまく行って良かった。

痛くて大怪我したけどな。

俺はこの後、とにかく腹が減ったので、飯を食わせて貰った。

部屋に運ばれてくる、超豪華料理を。

華ちゃんて、メッチャお嬢様みたいね。

食事の後、俺は別室へと案内された。

どうやらさっき寝ていたのは、華ちゃんのベットだったらしい。

そう考えると、少し名残惜しい。

宗司「もう少し寝ておくんだった。」

みかん「どうしてさ？さっきのベットのが良かったのだ？」

・・・

考えるな。

考えたら読まれる。

りんぴょうとうしゃかいちんれつざいぜんりんぴょうとうしゃかいちんれつざいぜんりんぴょうとうしゃかいちんれつざいぜん・・・

みかん「ブーブー」

案内された部屋は、至れり尽くせりの部屋だった。

今日から、俺の新たな生活が始まるんだ。

頑張ろう。

俺は思った。

痴漢撃退

世の中に、死にたいなんて思っている人は、ごまんといえるのだろう。
そのほとんどが、良い事と悪い事の割合、バランスが、悪い事の方が多い事を知っている。
そんな事無いと言える人は、実に幸せだ。
そしてそんな人は、きっと死にたいなんて思わない。
毎日毎日生きる事と戦って、心の中で泣いている人が、すぐ隣りにいる事に気がつかない。
今の世の中、一言で言って、優しい人に辛い世の中だ。
競争社会？
人をけ落としてでも幸せをつかもうとする人々。
まあ、それが別に悪いとはいわない。
ただ、それがお金につながる事がダメなのだ。
お金の無い人が、明日を不安に思いながら、生きなければならないのがいけないのだ。
今が楽しくても、明日が不安なのだ。
だからせめて、明日の不安以外の、負の感情を取り除けたなら。

ふかふかの布団、澄み切った空気、静かな目覚め。
なんだろう、この心地よさは。
俺は昨日家を出て、この河崎邸で暮らす事になった。
どうみても超大金持ちの家だから、この家で住まわせてもらえる以上、俺の生命が危機に犯される事は無い。

華「命の恩人だからあ〜一生いてもいいよお〜」
なんて、言ってくれていたし。
マジで一生いるよ？
俺の人生、これで全ての悩みが無くなったも同然だ。
それだけで、人はこれほど豊かな気持ちになれるのか。
枕の横に置いてあるクッションをベッドに、気持ちよさそうに眠るみかん。
話せる魔女っ子もいるし、未来ノートっていう遊び道具もある。
きっと俺は、今初めて生きてる喜びを知ったに違いない。
今なら何もかもが許せる気がする。
みかん「宗司の糞バカ！ホント私がいないとチキンなんだからあ・・・むにやむにや・・・」
なんだとこいつ。
寝言とはいえ、許されない暴言じゃないか。
俺はみかんのほっぺを、赤マジックで塗っておいた。
まだ気は晴れないが、これくらいで許してやろう。
俺は布団からでて、用意してあった服に着替えた。

・・・
ちょっとダンディーすぎないか？
俺の服は、着てきたものしかない。
それは今洗濯しているから、華ちゃんが用意してくれたのを着ただけだ。
みかん「おおおおおお！！宗司、馬子にも衣装！！」
うむ、苦しゅうない。
って、馬子にも衣装って、正確な意味なんだっけ？
聞かれると説明って難しいよね？
宗司「かなり大人っぽいスーツだな。ま、俺は何を着ても似合うけど。」

みかん「中身の悪さは、衣装でカバーなのさ。」

．．．

まあいい。

ほっぺの赤いみかんを見てると、ちょっと面白いからな。

しかしこのスーツは、誰のだろうか？

この建物には、男の人は住んでいないって言っていたような。

今両親はいなくて、華ちゃんとお姉ちゃんとお手伝いさん関係しかいないって言っていた。

もしかすると、お父さんのスーツかな？

深く考えても仕方がない。

俺は部屋を出た。

．．．

目の前に女の人がいる。

それもどこかで見た、少し目つきの鋭い時給1250円。

ああ、あの時の100万円じゃないか。

女「きゃー！！なんですよ！！なんで屋敷に男が！！」

みかん「きゃー！！」

みかんと一緒に驚いてるし。

って、おいおい、俺を不審人物と勘違いしているぞ。

なんとか説明せねば。

宗司「落ち着きなさいませお嬢様。」

．．．あれ？

こんなんでもいいのか？

女「あら？あなた、新しい執事か何かですか？」

みかん「違うよ。宗司は居候だよ。」

うむ、間違っちゃいないが、みかんの言葉は聞こえないのだよ。

宗司「まあ、遠からずも近からず。華お嬢様のボディガードにございます。」

まあ、命の恩人らしいし、嘘じゃないだろう。

女「ああ、あなたが華の言っていた．．．」

宗司「そうです。私がお兄さんです。」

．．．

女「きゃー！！！！」

10分後、ようやく落ち着いた。

俺が変な事言わなければ、すぐに理解してもらえたんだろうけどね。

姫「私の名前は、河崎姫ともうします。」

宗司「これはこれをご丁寧に。わたくし、尾北宗司ともうします。」

姫「ええ、妹の華から聞いておりますわ。」

むむむ。

しかし時給1250円が、華ちゃんの姉とは。

と言うことは、俺と同じくらいの歳かな？

宗司「まさか、あの猫100万円が姫さんだったとは、これは驚きですな。はっはっは！」

姫「なんですよ？それ？」

少し、疑問半分、不信感半分の表情になった。

宗司「お忘れのようですよ。数日前、公園のベンチに猫の入ったバックを、忘れておられたようですが？」

姫「ああ、あの時の。助かりましたわ。ありがとう。」

うむ。

しかし、喋り辛いな。

この姫さんは、普段からこんな喋りなのだろうか？

宗司「ところで姫さん、普段からそのような喋りをしておられるのですか？」

俺は、お嬢様だからってお嬢様の喋りをするのが、どうしても信じられない。

現に華ちゃんは普通だ。

．．．

いや、普通じゃないけど、お嬢様な喋りではない。

姫「や、やっぱり、どこかおかしいのでしょうか？」

やっぱり？

特におかしいって言うよりは、その喋りを使う事がおかしい。

つか、お嬢様って実際なんね？

宗司「お嬢様がお嬢様言葉を使う事がおかしい。」

俺は素直に指摘した。

姫「そうだよ。おかしいよね。だけど他人と話す時は、お嬢様言葉をつかえて、お父様が無理強いするのよ。ひどくない？」

．．．

いきなり変わりまくるのもどうかと思うけど。

でも、こっちの方が可愛いし、親しみがわくなあ。

宗司「うん。そっちのが良いよ。可愛い。」

俺は感じたままを伝えた。

姫「ええー！！か、か、か、わいい？そんな事言っても、私は騙されませんわよ。」

あら、戻った。

結構しゃべり方が身に染みついているのかな。

宗司「別に騙さないし。俺は嘘とお世辞が大嫌いだから。」

お世辞って、ある意味嘘だから、結局のところ嘘が嫌いって事なわけだが。

姫「そ、そう。」

少し姫さんは照れていた。

姫「そう言えば、宗司さんって、高校時代は、屋上の尾北って呼ばれて、モテモテだったそうね。」

．．．

宗司「何それ？」

聞いた事がない。

全くない。

つか、俺今まで女と付き合ったこと、一回しかないんですけど？

姫「華が言ってましたわよ。いつも屋上で哀愁漂わせてる尾北先輩は、1年生の間では人気あったって。」

なんじゃそりゃ？

確かに俺は、屋上にはよくいた。

ってか、いつもいた。

それはただ単に、友達がいなくて、死にたいなあ～って思って、屋上に行っていただけだ。

でも飛び降りる勇気もなくて、いつもグラウンドを眺めていた。

まあ、別にいじめられていたとかってわけでもないけど、とにかく人と関わり合いたくなかったからなあ。

でも、過去いじめられていた事はある。

いじめていた事もあるけど。

いじめられていた理由は、俺が目立つ存在だった事と、番長と呼ばれていた人の、好きな女に告白した

事だ。

いやあ、女一人である頃の俺は毎日が地獄だったな。

明日になるのがいやで、生きるのがいやで。

下手にプライドがあるから、下手に反抗とかして、より多く反感をかった。

一人の女が、俺のあの頃の人生を変えた。

でも、イジメもしていたから、文句ばかりも言えない。

いじめる理由は簡単。

友達がみんな嫌ってるから、俺は嫌いでもないんだけど一緒にいじめる。

今になって思うんだけど、俺が過去で一番後悔している事が、イジメをした事。

一番辛かったのが、いじめられた事。

だから俺のいる場所は屋上しかなかったんだ。

姫「どうしたの？宗司さん。」

あっ！つい昔を思いだして、ポーっとしていたようだ。

宗司「いや、確かに屋上にはいたけど、友達がいなかったから仕方なくいたんだけどねえ。」

姫「そうなの？宗司さん、友達いっぱいいたって、華が言ってたけど。」

友達？

んー・・・確かに時間を無駄に過ごすツレは、いっぱいいたかもな。

でもみんな、友達なんて言える奴じゃ無かった。

俺の友達の定義は、二人で遊びに行けるかどうか。

それくらい関係でないと、友達と言えないと思っている。

だって、あの頃のツレとは、もう一切のつながりがないじゃないか。

宗司「まあ、広く浅くはいたのかなあ・・・」

昔を思い出すと、また死にたくなる。

未来に期待がもてなくなる。

姫「まあ、少なくとも、華は宗司さんとお友達になりたいみたいですわね。」

友達になりたいか・・・

一度喋っただけで、そう思える人物に会った事なんてないから、気持ちが変わらん。

でも、華ちゃんとは魔女っ子の事もあるし、それなりに付き合いはしなくてはならないだろう。

てか、家においてもらってるのに。

宗司「俺は、いい子とだったら、友達になりたいな。」

姫「華は良い子ですわよ。あれ？またしゃべり方が変わってるうー！」

・・・

気がついてなかったのか？

だったらそれでもいいのに。

姫「あっ！そうそう、宗司さんのが年上だから、姫と呼んでくれて良いよ。」

宗司「ああ、姫。じゃあ俺の事も宗司で良いよ。俺、人は皆対等だと思ってるから。」

姫「そう？じゃあそうする。」

なんとなく、この子好きになれそう。

宗司「ところでさ、ちょっと聞いても良いかな？」

俺はどうしても聞きたい事があった。

姫「うん。かまいませんよ。」

宗司「なんで鞆に万札と猫が入ってたん？」

・・・

あれって不思議だよな？

だいたい猫を鞆にって、ありえない。

姫「あっ！あれは、って、中みたの？」

．．．

宗司「鞆の中からにゃーにゃー聞こえたら、普通中見るよね？」

姫「．．．内緒だよ？」

宗司「うん。」

姫「猫、可愛かったから、こっそり持って帰って、飼おうと思って。」

じゃあ、あの猫は、姫のじゃなかったって事ね。

見つけて拾って鞆に入れて、そして持って帰るタイミングをはかっていたのかもな。

宗司「じゃあ、あの猫は今飼ってるの？」

姫「どっか行っちゃった．．．」

まあ流石に、鞆に閉じこめられて怖かったか、野良だからなつかなかったか。

そんなところだな。

姫「と、ところでさ！」

もうこの話は嫌らしい。

姫「宗司は、ずっとこの家にいるの？」

えっと．．．

いたいんですけどダメですかね？

宗司「そうしたいんですけど。」

姫「ん？問題でも？」

宗司「いや、俺に問題はないんですけど、何もしないでずっとおいてもらうのも気が引けるって言うか。」

姫「気になさらずとも。」

これはどうとったら良いのだろう？

宗司「タダでずっとなんて、普通まずいと思われませんか？」

姫「命の恩人ですわよ？お礼しなかったら、こっちの神経疑われます。」

宗司「じゃあ、しばらくやっかいになります。」

姫「ずっといてくださって結構ですわよ。」

金持ちって、みんなこんな感じなんだろうか？

もしこれが普通なら、金持ちって、何か辛い事があるのだろうか？

宗司「姫って、何か欲しい物とか、希望とかってある？」

俺がそうたずねると、姫の顔に影が差した。

みかん「金持ちでも、欲しい物や望みはあるのさ。」

みかんはそう言いながら、飛び回っていた。

姫「特にはないですね。」

おいみかん、無いっていつてるぞ？

みかん「嘘なのだ。顔見ればわかるのさ。」

確かに、悩みがあって、それを話せない感じの顔をしている気がする。

宗司「俺にできる事、なんかあったら言ってね。やっぱり何もせずにおいてもらうのも気がひけるから。」

姫「気になさらないで。あえて言うなら、いてくださるだけで。この家、男の方がいないから。」

ふむ、力仕事とか、泥棒が入った時に頑張ってくれて事かね。

どっちもいやだけど、まあそんな事があったら、全力で頑張るか。

宗司「うい！」

俺は了承した。

姫「あー！やばいよ。待ち合わせ遅れちゃう！じゃあ、また！」

姫は右手を肩のあたりまで上げて横に振った。

宗司「じゃね！」

どうやら何か用があったようだ。
引き留めてたわけではないけど、悪い事したかな？
走って立ち去る姫を見ながら、少しだけそう思った。

朝食を食べ、部屋に戻ってきた。

宗司「さて、今日は何を書くかな？」

みかん「なんでもいいのさ。でも、出来れば確実に実行できるけど、かなり難しい事がいいのだ。」
それ、なんでも良くねえじゃん？

宗司「難しいな。とりあえず、難しくても実行可能となると、善意で書く事になるな。」
俺は考えた。

俺が考える善意。

はっきり言って、あまり思いつかない。

良い事なんて、今まで全くしてきた記憶がないからな。

悪意だったらいくらでも思いつく。

てか、この世の中、悪意ばかりだ。

だから死にたくなるんだよ。

高校時代、俺はいくつかのバイトをした。

最初にやったのはパン屋だった。

夏休み中だけだったけど、朝早起きは辛かった。

でも、あの頃の俺は、早く大人になりたかったから、頑張ってバイトしようと思った。

大人になりたかった理由は、子供社会の理不尽がいやだったから。

イジメもちろんだけど、学校や勉強に関してもそう。

テストで俺は100点とった事がある。

でも俺はそこそこの高校を受験する予定だったから、成績表はそこそこだった。

進学校を目指す奴は、俺よりテストの点数が低かったのに、最高の評価を付けられていた。

頑張っても正当な評価をされない。

だから、正当な評価をされる大人の世界にあこがれた。

でも、違っていた。

大人の世界も同じ。

イジメはもちろんあるし、いくら働いても、社員より頑張っても、正當に評価される事は無かった。

それどころか、下っ端のつらさを知った。

店長が、落ちたパンをこっそり販売していた。

信じられなかった。

それどころか、5秒以内ならオッケーだから、お前もそうしろって言ってきた。

俺は逆らえなかった。

結構高級なパン屋だったのに、落ちたパンを平気で売るように強要された。

手も洗わずに調理していたりもした。

仕事は、罪悪感との戦いだった。

食べ物屋は辛かったので、次はチラシ配りをした。

俺に仕事を教えてくれる先輩。

仕事ではなく、さぼり方を教えてくれた。

ココでも強制された。

俺はチラシを少しだけ配り、残りは捨てて、ファーストフードでコーヒーを飲みながら時間をつぶした。

罪悪感から、3日で辞めた。

その後もいくつかやったが、皆同じ。

上から、俺の定義で悪いと思われる事を必ず強制される。

もちろん、やれと脅されるわけではない。

でも、被雇用者は、そうするようと言われたら、やるしかないじゃん。

法律に反する事だってあった。

まあ、だから俺は、死にたいという気持ちも大きくなったし、働く気も無くなっていた。

これを、なんとか無くせやしないだろうか？

いや、仕事に限った事ではない。

人の悪意をこのノートで止められないか？

悪意を止める善意を、このノートに書く。

俺は考えた。

みかん「あー！さっきから、何考えてるのさ？さっさと何か書くのだ。」

宗司「ちょっと待て。もう少しで何かでてる・・・」

悪意に、逆らいたいけど逆らえない。

それを助けてやれる事。

宗司「これだ！！」

みかん「それだ！！」

・・・

俺は早速ノートに書いた。

ノートに書いたのは、「初めて痴漢をしようとした人を、俺は止める事に成功した。犯罪は未然に防がれた。」と書いた。

その後その書いたところまでを、日記が自動で埋めた。

俺は日記のとおり、電車でターミナル駅を目指す。

なんで俺は、あまり嬉しくない事をされる為に、恥ずかしい目にあうとわかっているのに、こんな遠くまで出かけにやなんのだ？

やる事はいたって簡単なんだけどさ。

みかん「文句いわないのさ。私が感謝してやるのだ。」

なんだか偉そうだな？

みかんって、こんなキャラだっけ？

みかん「お互いわかってくると、遠慮なく話すようになるのさ。」

まあ、わかるな。

俺が自分をそのまま出して喋るのって、母親くらいだもんな。

つき合いで言ったら、もうすぐ20年になるし。

って、うちの母親って、どう考えても普通じゃないよな。

昨日夜、河崎邸で目を覚ました後、俺は実家に電話をした。

しばらく家を出て暮らすからって。

そしたら、「ホントー？助かるわあ。あんたの分の食費で、何買おうかしら〜」なんて言って、軽く電話を切られた。

少しくらい心配するとかってないのかね？

気がついたら、俺は目的の駅に着いた。

ホームには、電車を待つ人々であふれかえってる。

宗司「はあ〜」

ギューギュー詰め電車の乗るのかと思うと、嫌になった。

みかん「さっさと2両目の真ん中に行くのさ。」

みかんに言われるまま、俺は移動する。

いた。

セーラー服の女の子。

この子を狙う男が、どこかにいるはずだ。

俺は日記のとおり、その子の横に並ぶ。

日記は、俺が書いた後は何も書かれなかった。

だからその後どうなるかわからない。

もしかしたら怖い人の痴漢を阻止して、後で袋叩きにされたりしないだろうな。

うーこわいよー！

電車がホームに入ってきた。

電車が止まる。

大量の人々が、駅に降りてきた。

この駅に用がある人、降りる人の邪魔にならないように、一旦降りる人。

さて、並んでる列の前の人が、電車に乗り始める。

俺も少しずつ前進。

さて、ドアに入った瞬間に俺はやらねばならない。

ドキドキ。

みかん「いくのだぁ！」

俺はみかんの言葉に押されて、セーラー服の女の子と背中合わせになるように、電車の中に入った。

前から人々が一気に押し寄せてきて・・・

宗司「いやぁ～ん！」

目の前に近づいた、ちょっと真面目そうなスーツの人に、俺のあそこを揉まれた。

スーツの男「あっ！いや、す、すみません。」

俺は無言で、男を睨んだ。

ドアが閉まった。

電車が走り出す。

電車に乗っている周りの人が、白い目で俺を見ていた。

「いやぁ～ん！」なんて言っちゃったからね。

恥ずかしい。

でもまあ、これでとりあえず、日記に書いてある事は全て達成だ。

で、この後、どうしたら良いの？

この男が降りるか、女の子が降りるまで、俺はずっと電車に乗り続けるのか？

って、何処まで行けば良いんだ？

みかん「どちらかが降りるまでは、乗ってた方がいいのさ。」

ま、そうだろうな。

あーしんど。

しかし俺の不安はすぐに解消された。

男は次の駅で、そそくさと降りていった。

良かった良かった。

では俺も次の駅で降りて、家に、いや、河崎邸に戻るか。

次の駅で降りた俺は、ホームの逆側にそのまま向かう。

宗司「痴漢撃退成功っと。」

みかん「よくやったのだ。」

そのまま、ついたホームの逆側の列に並んだ。

クイクイ。

ん？なんだ？

並んでいると、後ろから袖を引っ張られた。

振り返った。

みかん「おお！さっきのセーラー服なのさ。」
うむ、さっき痴漢にあいそうになっていた子だった。
もしかして、他からも痴漢されて、それが俺だと思って捕まえに来た？
いや、冤罪ですよ？
私は守ってあげたのですよ？

セーラー「あ、ありがとうございます。」

・・・

もしかして、守ってあげた事、わかってたのかな？

宗司「いえいえ、俺は女の子の味方ですから。ジェントルマンとして、当然の事をしたまでです。」

セーラー「あっ！はい。では、です。」

女の子は走って・・・

ホームの反対側にそのままならんだ。

すぐそこなんだけど。

わざわざお礼を言うために、電車を降りてきてくれたようだ。

目があった。

女の子は照れていた。

でもすぐこちらの電車が来たから、俺は電車に乗った。

宗司「ふふふ。」

みかん「宗司、いきなり笑って、気持ち悪いのさ。」

お礼言われるって、結構良いな。

俺はルンルン気分で帰宅した。

痴漢撃退 2

詐欺にあった時、騙される側も悪いという人がいるけど、これは間違いだろう。

ただの言い訳、騙す側の罪逃れだ。

ではイジメは、いじめられる方にも責任があるなんて言うけど、これは？

俺の考えだと、いじめられる側に原因はあっても、責任は無いと思う。

悪いのは騙す方であり、いじめる側なのだ。

それでも、いじめられる人に原因がある以上、結局いじめられるわけで。

俺は、今日も電車で昨日の駅を目指していた。

ノートに何を書こうか悩んで、結局思いつかず、昨日と同じ事を書いた。

すると、文章の一部は違うものの、概ね同じような未来日記ができあがってしまったのだ。

まさか、同じ奴が、また狙われているんじゃないだろうな。

みかん「可能性は高いんじゃない？あの子、何もいわなそうなのだ。」

確かに、昨日の子が再び痴漢にあう可能性は、極めて高く感じる。

俺は何故か、昨日の子ではない事を祈っていた。

しかし、期待は裏切られた。

昨日の子がいた。

今日は横ではなく、斜め後ろに並ぶ。

電車がホームに入ってきた。

ドアが開いて、昨日と全く同じような光景が目に入る。

降りる人が全て降りると、今日は女の子を追い抜いて電車に乗り、中の人に背中を向けた。

女の子と正面に向かい合う形だ。

セーラー服「あっ！」

俺の顔を見て、声をだしたけど、すぐに後ろの人に押されて、俺の手の中に収まった。

そこですかさず、日記に書かれていた台詞を言う。

宗司「この子に何か用ですか？」

俺の目は、女の子の後ろにいる、かなり年輩の男性を見つめる。

てか、睨んだ。

オヤジ「な、なんだ？俺はまだ何もしてないぞ？」

宗司「そうですね。まだ、ね。」

俺はまだを強調して言った。

走る電車の中、気まずい。

てか、俺は少し震えていた。

このオヤジの視線が怖い。

でも、視線をそらすわけにはいかない。

一駅は長かった。

オヤジは降りていった。

宗司「はあ～」

俺はため息をついた。

一気に気が抜けた。

みかん「よくやったのだ。これで今日も、ミッションコンプリートなのさ。」

みかんが喜びながら、電車の中を飛び回っていた。

さて、俺は次の駅で降りるか。

俺は降りる準備を・・・

って、俺、ずっとこの子を抱きしめてるんじゃない？

今度は違うドキドキが襲ってきた。

宗司「あっ、ごめん、抱きしめちゃって。」

これでは、マジで俺が痴漢だと言われても言い訳できねえ～

セーラー服「いえ。ありがと、です。」

混みあった車内で、とりあえずそれだけ言葉を交わした。

駅について、俺は電車を降りた。

何故か女の子も。

俺達は向かい合っていた。

もちろん、もう抱きしめてはいない。

ちょっと残念だけど。

って、俺の気持ちを勝手にねつ造して書かないで。

セーラー服「あ、ありがと、です。」

昨日と同じ状況。

俺はなんとなく、そんな状況を見て、明日も明後日も続くような気がした。

だから、なんとかした方が良くと思った。

宗司「君、名前聞いても良いかな？ああ、俺は尾北宗司って言うんだ。」

別にナンパしているわけではない。

ただ、都合上、名前は聞いておいた方が良くと思った。

って、なんの都合上だよ？

未来「み、未来、双葉未来って言います。よ、よろしく、です。」

ふむ。

何故聞いてしまったのかはわからないけれど、何時までもセーラー服なんて呼ぶのもおかしいよね？

宗司「ちょっと、お話したいんだけど、ちゃーしばきにいかへんけ？」

これじゃ完璧にナンパだな。

しかも変な大阪弁出てるし。

未来「は、はい。」

宗司「じゃあ、とりあえず、駅でようか。」

未来「コクコク。」

・・・

ナンパって、こんなに簡単にいくものだった？

だったら若い頃、もっとやっとくんだった。

俺達は駅を出てすぐのマクドに入った。

まあ、せっかく大阪弁でナンパしたし、ココも大阪呼びって事で。

俺達はドリンクだけ買って、適当な席についた。

さて、どうやって話をしようか。

いきなり聞いても、この子が話してくれるかどうか。

みかん「でも聞くしかないさ。」

まあな。

とりあえず聞いてみるか。

宗司「聞きたいんだけど、未来ちゃんって、結構痴漢にあったりするの？」

俺はなるべく優しく聞いた。

未来「えっ？・・・コク。」

頷いた。

やっぱり。

この子、痴漢されてても、絶対何も言えなさそうだな。

宗司「ずっと？」

未来「フルフル。」

宗司「最近になってからって事だね。」

未来「コクコク。」

未来ちゃんは、俯いたままこたえてる。

かなり、辛かったのだろう。

それに、話すのも嫌だったんだろうな。

俺もいじめられてる時、絶対に人には言いたくなかったから。

特に近い人には言えない。

ああ、だから他人の俺だから、ココまでこたえてくれたのかもな。

だったら、他人である俺がなんとかしてあげないと。

宗司「声を上げて、たすけを呼ぶ事もできないか？」

まあ、できないんだろうけど。

未来「コクコク。」

少し泣きそうな顔になっていた。

宗司「何か良い方法、考えよう。俺も、できるだけ助けてあげるから。」

俺何言ってるんだ？

助けてあげる？

ノートが無かったら何も出来なかったのに。

俺は自分を心の中で笑った。

未来ちゃんが、潤ませた目で、俺を見つめていた。

やべ、可愛い。

絶対助けてやる。

宗司「よし。作戦だ。」

俺達は店を出た。

外は既に暗くなっていた。

俺は財布の中身を確認して、デパートに向かう。

俺はデパートで、ある物を未来ちゃんに買い与えた。

出会いは再会

お金があることで、明日への不安が無くなった俺。

正確には、お金持ちの家に居候させてもらう事で、そして慰謝料とか言って小遣いまでわたされているからだけど。

未来ちゃんは、毎日の帰宅が不安なのだろう。

そして、それから逃れる為にやらなくてはならない事をする事も、不安で怖い。

きっと未来ちゃんは、先週辺りの俺と同じ、いや、俺以上に苦しんでいるはずだ。

今日は、ノートの力をかりない。

なんとなく、そうしたかったから。

みかん「ノートに書けば、簡単解決間違いなしなのさ。」

俺はノートに、いや、みかんに助けられたんだ。

だから、今度は俺が未来ちゃんを、自分の力で助けたい。

みかん「格好つけたいだけなのさ。」

まあ、そうなんだろうな。

みかん「だろうじゃなくて、そうなのさ。」

．．．

駅についた。

未来ちゃんがいた。

目があったけど、俺は昨日言っていたとおりに、少し離れた位置に並ぶ。

今日もおそらく、昨日までと同じように、痴漢をしに来る人が現れる。

昨日帰った後、ネットで痴漢サイトと呼ばれる情報サイトを覗いた。

簡単に見つかると思っていなかったけど、あっさり見つけてしまったのだ。

未来ちゃんに関する情報を。

いつもこの時間のこの場所に乗る、セーラー服の子は楽勝だと書いてあった。

だからきっと、この時間を待っている人が、複数人いる可能性もある。

大量にいたら、みんなで困ってなんて事もあり得るし、俺だけでは捕まえられるか。

電車が来た。

ドアが開く。

下車する人が降りると、俺は最後尾にならんでゆっくりと乗車する。

今日は未来ちゃんに隣接していない。

かろうじて視界に入る位置。

とりあえず俺は、未来ちゃんを見守るだけ。

ドアが閉まる前から、未来ちゃんの表情が変わった。

痴漢？誰だ？

俺は周りの人を見る。

二人か？

とにかくすでに痴漢行為を始めたようだ。

ドアが閉まる。

俺は心の中で、未来ちゃんを応援した。

頑張れ未来ちゃん、引くんだ。

防犯ブザーのスイッチを入れるんだ。

そう、昨日買い与えたのは、防犯ブザー。

ピンを引き抜くと、大きな音が鳴り響くやつ。

これをならせば、みんなの注目を集められるから、痴漢を止める事が可能だ。

頑張れ！頑張れ！勇気を出して！

俺は心の中で叫んだ。

ビー———！！！！

大きな音が、車内に鳴り響いた。

俺はすかさず声をかける。

宗司「どうしました？痴漢ですか！！大丈夫ですか！！」

俺は大きな声で、未来ちゃんの方へと声を上げた。

俺の声をきっかけに、未来ちゃんの側にいた男二人が動揺する。

宗司「逃げるなよ！」

俺は勇気を振り絞って言う。

こんな事を言って、キレられたら正直怖い。

相手は二人だし。

でも、未来ちゃんも、勇気を振り絞って防犯ブザーを鳴らしたんだ。

男の俺が頑張らないわけにはいかない。

男1「な、なんだよ。」

う、キレてる？

俺を睨んできた。

俺も頑張ってにらみ返す。

足が震えて捕まえられないかも。

しかし、その近くにいた、サラリーマン風男と、体育会系のような学生が、その男と俺の間に体を入れて、痴漢男の腕をつかんだ。

次の駅で、俺と未来ちゃん、そして捕まった二人と、捕まえてくれた二人は、電車を降りた。

俺はすぐに駅員を捕まえて、痴漢した二人を差し出した。

後は警察が来て、いろいろ聞かれ、俺達は解放された。

時間も遅くなっていたので、俺は未来ちゃんを送る為に、一緒に電車で揺られる。

宗司「頑張ったな。」

今日初めて、未来ちゃんとゆっくり話していた。

未来「あ、ありがと、です。宗司さんが、い、いてくれるから、できました。」

宗司「そっか。」

怖い事って、なかなか出来ないけど、見守ってくれる人、もしもの時に助けてくれる人がいれば、結構できたりするもんなんだよな。

なんだか嬉しかった。

結局、犯人に少しでも痴漢をさせてしまい、未来ちゃんが嫌な思いをした事には、罪悪感が無いわけではなかったが。

痴漢は、現行犯じゃなきゃ、捕まえられない。

なんだか理不尽に思った。

しばらく電車で揺られてから、俺達は電車を降りた。

ん？

駅を出てから、どっかで見た事ある景色だなと思った。

俺は振り返って駅を見た。

・・・

桜町駅・・・

宗司「昔住んでた町？・・・」

未来「えっ？今まで、き、気がついて、無かった、んですか？」

・・・

あれ？

この言い方、俺の事知ってるのかな？

俺は、脳内メモリを引っ張り出した。

双葉未来、双葉未来、双葉未来・・・

宗司「あっ！」

みかん「あっ！じゃねえよ。」

小学生時代、近所に住んでた、未来ちゃん？

ええ——！！！！

宗司「もしかして、未来ちゃん、俺の事覚えてたの？」

みかん「私は無視かい！」

未来「う、うん。最初、見た時から、たぶんそうかと・・・」

なんとまあ、奇跡的な再開だこと。

こうして俺達は、久しぶりの再会を果たした後、再び友達という名のつながりを復活させる事となった。

みかん「って、今日はまだ終わってないのだ！！」

そのようだ。

未来「ところで、こ、この、ちっちゃな魔法使いさんは、いったい・・・」

宗司「み、見えるの？」

みかん「ひゃっほ〜い！！嬉しいのさ！」

どうやら俺達の再びの出会いは、必然だったらしい。

こうして、マジで今日の日は終わりを告げるのだった。

ああ、ちなみに痴漢サイトでは、今日二人が捕まった事が書かれていた。

他にもまだ、痴漢をしようとしていた人がいたようだ。

でも、これを書いてくれたおかげで、もう未来ちゃんが、同じところで痴漢にあう事はないだろう。

良かった良かった。

魔女っ子探し

どうやら、世間では夏休みに入っているようだ。

まあ、居候でニートで穀潰しな俺には、全く関係ない事。

でも、高校生であるお二人が会うには、絶好の休みで。

今、河崎邸に、未来ちゃんが遊びにきていた。

なんと言っても、魔女っ子が見えてしまう子だ。

とりあえずみんな集めてみたくなるのは、仕方の無い事だろう。

華「よろしくねえ〜。河崎華だよお〜」

未来「よ、よ、よろしく、です。双葉未来、です。」

宗司「あ、俺様が尾北宗司じゃ、よろしゅうにな！」

みかん「なんでそんなに偉そうなのさ。あ、私はみかんなのさ。」

ゆず「ゆず、です。華の魔女っ子です♪」

今、魔女っ子に関わる事のできる者と、魔女っ子が集合だ。

今日は顔見せと、もう一つ目的がある。

みかん「私達が見えるって事は、未来ちゃんに仕える魔女っ子が、地球にいるって事なのさ。」

もう魔女っ子で定着してるし。

まあ、他に表現できないけど。

宗司「だから、せっかくだし、魔女っ子探しをしてみようって思う。」

ゆず「でも、二人でも多いのに、三人も集まるなんて、凄いよね。」

確かに、最初にみかんと話した時に聞いたところによると、まずありえない事なのだ。

それに、ご主人様と出会った魔女っ子は、他のペアとは出会う事ができないようになっているらしいし

。

だからなんとなく、この出会いには意味がある気がした。

未来「わ、私も、ま、魔女っ子さんと、お友達に、なりたい、です。」

みかん「いえ〜い！私も友達になりたいのさ。」

宗司「まあとにかく、俺は書くぞ。」

俺はノートに書き始める。

基本ノートの事は、他言無用だ。

教えても記憶からすぐに消えてしまうらしい。

でも未来ちゃんは、早ければ今日中に所有者になるのだから、おそらくは大丈夫だろうという話だ。

てか、魔女っ子が見えるしな。

俺はノートの中心に、「未来ちゃんの魔女っ子が見つかった。良かった。」と、書いた。

しばらくするといつものように、ノートを未来日記が埋めてゆく。

未来「す、すごい。」

俺が記入した部分までを、文字が埋めた。

俺達は、そう、正に俺達は今新幹線に乗っている。

俺と華ちゃんと未来ちゃん。

皆一緒の行動。

何故、華ちゃんまで一緒なのだろうか。

一緒に出会った方が良いて事か。

契約するのを河崎邸に戻ってからにすれば、新しい魔女っ子との干渉もオツケーなはず。

おそらくは何かあるのだろうけど、今回の日記ではわからない。

書いたのが、真ん中だったのが悪かった。

正直前文のスペースが足りなかったようだ。

書き出しも、「俺と華ちゃんと未来ちゃんは、大阪についた。」から始まっている。

だから、まず大阪まで行かなければならないのだ。

おそらくは今日中に帰ってこれないような気がする。

まあ華ちゃんは、両親の会社の系列ホテルに泊まれば良いとか言ってたし、未来ちゃんも、心配する両親なんていないからなんて言っていた。

全く、今の世の中どうなってるのかね。

大切な娘が男と外泊ですよ？

まだ高校生ですよ？

放っておいていいのですか？

みかん「そんな事言ってるわりには嬉しそうなのさ。」

未来「えっ？どうか、したん、ですか？」

華「魔女っ子は、ご主人様の心が読めるからあ〜、きっと宗司さんの心にこたえたのかとお〜。」

未来「そう、なんですか・・・」

みかんはすぐに俺の心を読んで、普通に返事しやがるからな。

みかん「でないと、宗司が声だと、一般の人が変な目で見ると見るのだ！」

うむ。

宗司「だからみんな、外で魔女っ子と話す時は、こっそり喋らないと、独り言いってる変人だと思われるぞ。」

俺はこっそりと二人に伝えた。

華「ですねえ〜」

未来「コクコク。」

どうやら二人ともわかってくれたようだ。

ああ、もう二度と犬には笑われたくないものだ。

って、笑ってたかどうかは知らないけれど。

そんなこんなで俺達は、昼過ぎに新大阪駅に着いた。

実は中学時代、少しだけ住んでいた事があるから、少しはわかると思っていたけど、中学時代の記憶なんて、ほんの些細なものだったようだ。

全くわからない。

とりあえず俺達は、駅構内にある茶店で軽く食事をする。

アンドミーティング。

まずは食事をする、携帯の確認。

俺の携帯は実家に置いてきたけど、河崎家の施しにより、携帯と、多いくらいの小遣いを貰っていた。

ホント、マジで姫や華ちゃんに何かかえさんとな。

皆で番号とメアドの交換。

つっても実質、華ちゃんと未来ちゃんの交換だけだけど。

宗司「これから大阪にみんなで向かう。それから適当に街を歩くけど、日記によると皆バラバラになるようなんだ。」

日記の四分辺りのところに、「俺は、華ちゃんと未来ちゃんと合流できた。」とあるから。

おそらく大阪駅近辺をウロウロして、犬を追いかける辺りでバラバラになると予想されるけど、詳細はわからない。

この日記は全て俺目線だから、別れている間の二人の行動も謎だ。

そこは華ちゃんも、日記書いてみればと思ったんだけど、華ちゃんは未だに、日記を全て実行できた事が無いらしい。

ゆずちゃんがあきれていたけど、一体何を書いているのやら。

だからまあ、書いても無駄と言う事で、そこは俺さえ達成すればなんとかなるだろう。

宗司「でだ、日記の時間を予想するとだ、夕方6時頃に合流せねばならないから、一応その時間に待ち合わせ場所を決めておく。」

華「大阪わからないよお〜」

未来「わ、私も、怖い、です。」

・・・

こんな子を放っておかなければならない時間があるなんて、不安だ。

マジで高校生か？

みかん「そう言うなって。可愛いから良いじゃないのさ。」

また勝手に。

華「何が可愛いのお〜？」

宗司「いや、気にしない気にしない。で、場所はココにしよう。ココだったらわかるでしょ？」

華「・・・」

未来「・・・」

おいおい、マジっすか？

まあ、女の子は、脳の仕組みが男と違って、方向音痴だって聞いた事があるけど、これほどなんですか？

それともこのジャリッ子コンビが馬鹿なだけなんではしょうか？

みかん「ジャリッ子、うましかぁー！」

みかん、なんでそんなに嬉しそうなんだ？

宗司「まあ、一応携帯もあるし、最悪はタクシーで集まれる所に変更しよう。オッケー？」

華「はい！」

未来「お金持ってるの、不安です・・・」

普通、持ってないと不安なんだけどね。

まあガキの頃なら、怖いお兄さんにとって不安もあったけど。

宗司「じゃあ一万円だけ、靴下の中にでも入れておきなさい。」

未来「は、はい。」

こんな話をしてから、俺達は大阪駅へと移動した。

さて、最初の日記をクリアして、次は街に出る。

はっきり言って、全くわからない街だ。

宗司「そうそう、地下は入るなよ。迷路になってた記憶がある。」

華「へえ〜楽しそうだねえ〜」

・・・

この子、地下に行きそうだね。

未来「う、うん。わかった、よ？」

この子は、地下に降りないと思っても、気がついたら地下にいるタイプだな。

はぁ〜

とりあえず俺がいるうちは、とにかく気を付けて歩いた。

しかし、しばらくすると、日記にある犬を見つけてしまった。

俺は、何故かこの犬を追いかける事になるんだけど、どうしてかはわからない。

犬はさりげに近づいてきた。

なんとなくそっぽを向いて、わざとこちらから視線を外しているように見える。

メチャメチャ怪しい。

俺達とすれ違う、かと思ったその時。

華「わぁ〜！」

って、少し目を離した隙に！

華「きゃぁ〜！」

あら、スカートをくわえて逃げていったような。

・・・

俺はシャツを脱いで、華ちゃんに渡した。

宗司「これ、まいて。犬は俺が追いかける！」

華「うん。わかったよお〜。でも、スカートくらい買えば・・・」

華ちゃんのことを最後まで聞かないうちに、俺は犬を追いかけて走っていた。

こんな事って、実際あるのね。

まあこれはきっと、ノート力なのだろうけど、ベタなノートだな。

みかん「う、五月蠅いのだ！」

何故かみかんが、赤くなって怒っていた。

やっぱ自分のノートを馬鹿にされたのが嫌なのかな？

とにかく今は、スカートを取り返さなくは。

既に周りの景色は全くわからない。

華ちゃん達の姿ももちろん見えない。

って、スカートくらい、華ちゃんなら簡単に買えるな・・・

今更思っても、もう遅かった。

しかしノートには、スカートを取り返す要項は書いてない。

取り返すのも面倒になってきたので、俺は近くにあったベンチに座った。

みかん「面倒って言うか、疲れたのさ。」

うむ、そのたうり！

だからしばらく休む。

「寝ていて起きたら4時だった。」ってのがあから、このまま寝ていても大丈夫だろう。

みかん「その前に、あの虫が顔に止まってびびった。ってのがあったような。」

宗司「それって、寝る前だったかな？」

そう言って寝ようとしていた体を再び起こした時、顔に何かが・・・

まあ虫なんだけど、あの虫って、結構でかいのね。

みかん「ぎゃー————！！！！！！Gがでた————！！」

・・・みかんはどこかへと飛んでいった。

って、G？

宗司「うぎゃー！！」

俺は顔の虫をはらった。

すぐにGは飛んでいった。

うーびびった。

あの虫って、Gだったのね。

そらびびるは。

しかし、みかんは何処に？

まあ、そのうち帰ってくるだろう。

俺はそのベンチでそのまま寝る事にした。

目が覚めたら・・・やっぱり4時だった。

ココまで正確にノートどおりになってしまうのって、逆に怖いよな。

俺は起きあがり、立ち上がる。

・・・みかんがいねえ。

全く、どこいきやがったのか。

俺はとりあえず探した。

でも、全然どこにいるのかわからない。

みかんって、一人で河崎邸まで帰ってこれるっけ？

ああもう。

おれは走って探した。

ん？そう言えば、起きた後、俺はしばらく走るんだったな。

くそっ！

ゆっくり探す事もできやしねえ。

ああ、でもさ、日記の後半余ってるし、もし見つけれなくても後でなんとかなるんじゃないね？

でも走らないといけないんだよな？

そうして走っていたら、華ちゃんのスカートをくわえた犬が、俺の方を見ていた。

おお！キャツめ！

とりあえずスカートを取り返すぜ！

宗司「うおおおおお！！！」

5時30分。

ついに取り返した。

俺は、俺はやったのだ！！

って、スカートボロボロだし、やったって言えねえだろうな。

つーか疲れたよ。

もう一步もうごけねえって・・・

華「宗司さんだぁ〜」

未来「ホントだ。」

俺は道にへたって座っていると、その道を二人が歩いてきた。

華ちゃんは既にスカートを買ったようで、俺のシャツは手に持たれている。

とりあえず、合流するために何かをする必要が無くなって助かった。

後は、魔女ッ子を見つけるだけだ。

って、この場所、さっき俺が寝ていたベンチの前じゃん。

俺は立ち上がった。

宗司「なんとかスカートは取り返したんだけど、ボロボロになっちまった。華ちゃんごめん。」

俺は一応謝る。

華「いいよお〜。あ、シャツ、ありだとうだよお〜」

華ちゃんは俺にシャツ差し出してきた。

俺はそれを受け取ると、近くのゴミ箱にスカートを捨てて、シャツを着た。

少し、捨てるのはもったいないような気もするな・・・

「何を言ってるのだ？」みかんの声が聞こえたような気がした。

宗司「さて、日記は全て実行したから、後は出会うだけなんだけど・・・」

俺は辺りを見回した。

ベンチの上に魔女ッ子の姿があった。

宗司「みかん、そんなところにいた・・・」

違った。

今日探していた魔女ッ子だ。

魔女ッ子「おい、お前、あいつのご主人様か？」

魔女ッ子は、持っていた爪楊枝のようなもので、ベンチ後ろ側の芝生を指した。

華「うわぁ〜虫さんが刺さってるよお〜」

未来「あ、あの、それ、ゴキブリ・・・」

魔女ッ子の持っていた爪楊枝のような物には、昼間のGが刺さっていた。

で、指し示したところには、みかんが眠っていた。

魔女ッ子「この虫に追いかけられて、気絶しとったぞ。」

どうやら、みかんがGに襲われ気絶し倒れたところを、この魔女ッ子が助けてくれたようだ。

宗司「ああ、ご主人様だ。君が助けてくれたのかい？ありがとう。」
俺は素直に礼を言ったが、Gが気持ち悪く動いていたので、少し後ずさった。
未来ちゃんも同じように。

魔女ッ子「ん？どうした？これが怖いのか？」
俺と未来ちゃんが、コクコクと頷くと、Gは炎に包まれて、一瞬に燃え尽きた。
・・・

何？
どうしたんだ？
魔女ッ子「ところで、みんな私の事見えてるみたいやけど、もしかしてあんた、私のご主人様な
んか？」

指さしたのは、未来ちゃん。

未来「えっと・・・」
まあいきなり、あんたがご主人様かと言われても、どうこたえて良いか困るよね。

宗司「たぶんそうだろう。俺達はお前を捜しにきたんだから。」

みかん「おお！！みつかったのだ！良かったのだあ！」
いつの間にか目を覚まして、みかんは俺の方へと飛んできた。

魔女ッ子「良かった？ふん。全然良くないわ！」

ゆず「えっ？」
みかん「なんでー？」

宗司「どういう事なんだ？魔女ッ子はみんな、ご主人様を捜してるんじゃ？」
みかんの話だと、魔女ッ子はこの星でご主人様をみつけ、ノートの力によってエネルギーを集める。
それが目的だと聞いていた。

その後どうなるのかしらないけど、ベタな展開だと、元の宇宙に帰っていくとか、人間になれるとか、
そんな展開だろ？

普通・・・違う？
魔女ッ子「おいお前ら、人が変な目でみとるけど、ええんか？」

周りを見ると、人が沢山行き来しており、何人かが俺を不審な目で見ていた。
やべ、ベンチに話しかける、変人だと思われたかも。

宗司「とりあえず、予約してあるホテルに行こう。」
俺は振り返って、華ちゃんと未来ちゃんに話しかけた。

華「わかったよお～」
未来「は、はい。」

おい、みかん、その魔女ッ子をつれてきてくれ。

みかん「わかったのさ。」
みかんは了解すると、魔女ッ子に話しかけた。
みかん「あんた、なんて名前なのさ？私はみかんなのさ。」

すもも「すもも。既にレベル3のエリートや。」
レベル3？

エリート？
みかん「おお！そうなんだ。って、でもご主人様いないのさ。」

すもも「今からその話しにいくんやろ？つれていかんかい。」
みかん「うん。そうなのさ。」

既に歩き始めていた俺達の方に、みかんとすももが飛んできた。

転機そして決意

ホテルの一室、俺達はソファ、魔女っ子達は中心のテーブルに座っていた。

宗司「すももは、ご主人様が見つかって、良くないって言ったけど、その辺教えてくれないか？」
まずはそれが聞きたかった。

すもも「まあ、全部話したるわ。未来とかゆうその子、私のご主人様になるんは、もう避けられそうにないしな。」

すももは偉そうに、テーブルの上に座った。

すもも「実はな、私は既にご主人様がおってん。で、殺されたんや。」
実に恐ろしい事を、すももは平気な顔で口にした。

華「えっ・・・」

未来「う、う・・・」

宗司「殺された？何それ？」

昨今、殺人なんて毎日どこかで起きている。

でも、身の回りに起こった事なんてないから、少しドキドキしてきた。

すもも「私はもうかなり前からこの星にきとってな、レベル3まであがってん。」

宗司「そうそう、そのレベル3ってのはなんだ？」

さっきも気になった事だ。

すもも「エネルギー集めるのは聞いとるな？」

宗司「ああ。」

すもも「それを集めていくと、うちのレベルが上がっていくねん。まあこの星で言うと、魔法使いレベルって事やな。」

なるほど。

そう考えると、エネルギー集めてレベルが上がると、難しい事も簡単にできたり、悪意の望みも叶いやすくなる？

みかん「そのとうりなのさ。」

すもも「まあそれで、私はレベル3まであがってんけど、ご主人様が殺された。」

どこまでレベルが上がるのか知らないけど、ご主人様が殺されたら、また新しいご主人様が必要なんじゃないだろうか？

すもも「レベルは3までしかあがらんし、私にはもう必要無かった。」

なるほど、だからいらないって事か。

みかん「でも、ずっとご主人様がいないと、レベルが下がるのだ。」

宗司「じゃあ、やっぱり必要じゃないか。」

すもも「まあな。でも、みんなが早くレベル3になってくれれば、この星での役目は終わる。」

役目？

みかん「私達は何人いるかわからないけど、みんながレベル3になった時点で、みんなとお別れする事になるのさ。」

ほう。

それになんの意味があるのかは知らないけれど、魔女っ子学校の課外授業みたいなもんかな。

みかん「そんなもんだと思ってくれればいいのさ。」

すもも「で、まあ、ご主人様のいる魔女っ子と、その主人同士が干渉できないようになってるのは、知っとるな？」

宗司「ああ、会う事も見る事もできないんだろ？」

これはみかんから聞いている。

すもも「じゃあ、なんでそうなるかわかるか？」

宗司「そら、みんな集まって悪い事する可能性があるからだろ？一人ではできなくても、人が集まれば可能な事は多い。」

人間は、人が集まると悪い事を平気でするようになる。

イジメだって、一人だとしめないけど、人数が集まるとするし、信号無視だって、みんなで渡れば怖くない。

すもも「まあ、それもあるな。でも大事なんはそっちちゃう。」

宗司「他にも理由があると？」

すもも「こんな力使える奴が他におるって、怖くないか？そっちの華が日記に、宗司が死ぬって書かないともかぎらんぞ！」

華「そ、そんな事しないよお〜！」

宗司「確かに、華ちゃんは絶対にそんな事はしない。でも、全く知らない奴がノートを持ってたら、怖い。」

確かにすももの言うとおりで。

宗司「でも、悪意のあるものは、簡単には達成できない未来日記になるはずだから、不可能なんじゃない？」

人をノートで殺すなんて、明らかに悪意がある。

デスクのように、世の為人の為で使ったとしても、人殺しは誰もが認める罪になるのだ。

華「レベルかなあ〜？」

すもも「そう。レベルが上がると、悪意からの事でも、達成可能になるんや。」

そうか。

それですももは、レベル3まで上がって、それくらいの事が可能になった。

宗司「もしかして、殺されたって・・・魔女ッ子を持つ者に？」

すもも「おそらくな。会う事もでけへんかったから、そうやとは言われへんけど、証拠に近いもんはある。」

すももがご主人様をほしがらなかった理由。

またご主人様になった人が殺される可能性があるって事か。

未来「じゃ、じゃあ、私、私が、殺される・・・」

未来ちゃんが、脅えていた。

華「私も・・・」

華ちゃんも・・・

俺は、とんでもない事をしたんじゃないだろうか？

魔女ッ子と仲良くできたら楽しいとか、ノートが面白いとか、そんな軽い気持ちで、魔女ッ子と引き合わせた。

でもそれは、結果的に命の危険を呼ぶ事になった。

みかん「それ違うのさ。たとえばノートに、魔女ッ子が見える人を殺す日記を書かれたら、契約してなくても殺されるのさ。」

たしかにそうだけど、そこまでする必要もないだろう。

やっぱり、会わない方が殺されない可能性が圧倒的に高い。

すもも「そやな。それに、私のご主人様を殺した奴、きっと、もっとでかいこと考えとるで？きっと世界を牛耳るつもりやろな。」

・・・

世界を？

そんな奴に？

どんな奴なのか知らないけど、私利私欲の為に人を平気で殺す奴だ。

今の世の中が腐っているとは言っても、こんな奴に世界を動かされるよりはマシだろう。

本当にそうか？

任せてみたら、今のこのダメな、生きていて楽しくない世の中が変わるかもしれない。

でも、俺は今、生きていたいと思っている。

このみかんのおかげで。

俺はみかんを見た。

みかん「やるしかないのだ。腐ってるなら、宗司を変えればいいのさ。」

俺が変える？

イジメの無い世界に。

一部の人間が富を貪るシステムを壊す為に。

戦争の、殺しあいの無い世界を作る為に。

できるか？

できないだろう。

でも、少なくとも、今を壊されるのはいやだ。

宗司「俺達は3人いる。協力すれば、なんとかなると思う。死にたく無ければ、毎日ノートの最後に、俺達3人が生きて終わる事を書いて実行すれば良いんだ。」

もしかしたら、それはかなり難しい日記になるかもしれない。

でも3人のうち一人でも実行できれば、いけるんだ。

一人よりも圧倒的に可能性はある。

華「私はやるよお～。宗司さんに助けてもらった命だし～。」

ゆず「うん。絶対その悪い人をなんとかする。」

未来「わ、私、も、頑張る。」

みかん「当然なのさ。やるのさ。」

宗司「ああ、世界の平和の為なんて、大それた事は言えないけど、少なくとも今を守る為に。」

そしてこれは、きっとそいつを殺すって事につながるんだろうな。

それ以外の解決方法が、俺には見つけれなかった。

行動開始

未来ちゃんとするももは、契約を済ませた。

とたんにノートが消える。

どうやらノートが必要なのは、レベル1の間だけらしい。

レベル2になると、心の中で結果を思い描くと、それまでの道順が見えるらしい。

で、レベル3になると、その道順が不可能なら、別の道順に変更できる。

なんどもなんども書き換えて、そして実行可能な方法を見つけるってわけだ。

未来ちゃんには、既に未来の日記を、自由自在に書ける能力が備わっているのだ。

それは、あることを達成する最良の方法を、見つける事ができる能力。

すもも「じゃあ、今度は、昨日ゆとった、証拠をみよか。」

すももの支持で、ネットに繋ぐ。

すもも「あれ？こんな画面ちゃうかったぞ？これはホンマにネットか？」

今いるのは、河崎邸の俺の部屋。

そこにあるPCで、俺はすももの言うとおりに、インターネットに繋いだのだけど、どうやらアドレスとかは知らないらしい。

とにかく、前のご主人は、ネットでどこかに繋いでいて、魔女っ子を持つ人を見つけたようだ。

それを考えると、直接は会えないし見えないけれど、ネット上では接触する事ができるって事だ。

未来「あ、あの、検索キーワード、未来日記で、ヤフーで、検索してみて。」

すもも「未来は未来が見えるで。それで見つかるはずや。」

宗司「なるほど。」

俺はすぐにヤフーに繋いで、未来日記と打ち込む。

そして検索ボタンをクリック。

最初のページの三つ目に、未来日記というタイトルの、ブログを発見した。

これはいかにもって感じだ。

俺はふと気がついた。

相手もレベル3。

不用意に近寄ってはいけない。

IPアドレスから身元を特定なんて、物理的に可能な足跡を残したら、はっきりいってやばそう。

既に検索キーワードを打ち込んでしまっただけでもやばいが、日本の企業には、個人情報保護が義務づけられてる。

この程度だったらまだ大丈夫だ。

俺は自分に言い聞かせて、一度ブラウザを閉じた。

華「どうしたのお〜？」

すもも「さっさとせえや。」

俺は真剣な顔を作った。

命をかけての行動なんだ。

慎重に慎重を重ねないと。

宗司「これからの行動は、慎重に慎重を重ねなければならない。」

みかん「私にはよくわからないけど、きっと宗司がただしいのさ。」

すもも「これって、そんなにやばいんか？」

すももは、PCを指さした。

まあ、言っているのは、インターネットの事だろうけど。

宗司「さっき、もしあのまま未来日記を開いていたら、未来日記のサイト主に、俺達というか河崎の誰かがアクセスしてきた事が、ばれる可能性があった。」

華「えっ？そんなことがわかるのお～？」

宗司「まあ、そこまで割り出すには、いくつかの関門をクリアする必要があるけど、犯罪捜査とかなら、行き着く事ができる。」

そうなんだ。

IPアドレス。

これは個人情報そのものだと言ってもいい。

そのままアクセスするのは、私がアクセスしましたと言っているようなもの。

だからさっきの行動で、ヤフーは、河崎家のPCが、未来日記を検索した事を知る術を得た事になる。まあヤフーは日本一の検索サイトだから、セキュリティもしっかりしていると思うから、まず大丈夫だとは思いますが、少しの間を見せてしまったも同然。

今日はもうココで止めておかないと。

みかん「でも、私でも知らない事、向こうが知ってるとは限らないのさ。」

宗司「いや、知っている。」

確かに、ネットが普及してかなりになるけど、未だに個人情報の大切さを理解していない人々が多い。

IPアドレスの事も、全人口の一割も理解していないだろう。

すもも「なんで知ってるって言えるねん？」

理由は最低一つはあるけど。

宗司「すももの前のご主人様は、未来日記の奴に接触したのは、ネットだけじゃないのか？」

すもも「そうやけど。そのネットの日記に書いてある事止めようとして、それで逆に殺されたんや・・・」

すももは少し俯いた。

いままで平気で話してるように見えたけど、本当はきっと凄く悲しんだんだろうと思った。

宗司「この日記、知らない人につながろうとした時、おそらくは知る手順を踏まないといけない気がする。偶然ってのもあるけど、悪意の場合は厳しい。」

ゆず「どういう事？」

宗司「たとえば、俺がどこか知らない国の大統領を、殺そうと思ったとする。書くと、きっとまずは、大統領が誰かを調べて知り、それから後が続くはず。」

すもも「なるほどな。」

宗司「まあ、そうあって欲しいという希望的観測も入ってるけどね。実際俺達は、すももを知らなかったけど、出会えたわけだからな。善意としてだけ。」

華「じゃあ、もし向こうが、善意で私達の事を調べたら・・・」

俺もそれは考えたが、そこは大丈夫だろう。

宗司「それはたぶん平気。俺が100万欲しいと思う。普通には手に入れられないから、恵まれない子に寄付するつもりで手に入れる。できると思うか？」

みかん「最終的に自分の物にしようとしていけば、それは悪意なのさ。」

宗司「まあそういう事だ。後は悪意だとどれほど難しくなるか、それに期待するしかないわけだけど、だからこそ、少しでも慎重にいかないといけない。」

そして、相手がネットに詳しいと思われる理由は、もう一つある。

リンク先になっていたアドレス。

ある小さな国が運営しているサイト。

このサイトに関する情報は、国家機密として扱われている。

だから、ココの利用者情報は、一切外に出る事はない。

まあ、この国以上の力を持てば、或いは可能かもしれないけど。

そんなわけで、ココのサイト利用者は、犯罪情報や、アダルト情報、とにかく普通公開してはいけないものを掲示するのに利用している。

それを知ってココを利用している人が、未来日記を書いている。

それだけで、インターネットの事をよく知り、遊びでやってるのでは無い事がわかった。

宗司「とにかく、普通にアクセスは危険だから、皆、アクセスはしないように。」

華「うん。わかったよお〜」

未来「は、はい。」

俺達は気を引き締めて、今日の寝床についた。

懐かしき過去

今日は午前中からネットカフェで調べ物だ。

華ちゃんと未来ちゃんには、エナジーを少しでもためるよう言っておいた。

俺は、昔やっていたパソコン通信サイトのメンバーが運営しているサイトに、ゲストでアクセスしてみる。

とりあえず入る事ができた。

「未来計画」と言われるサイト。

草の根パソコン通信では、有名なサイトで、しかしあまり知られていない。

裏の世界の住人のみに知る事がゆるされた世界。

死にたかった俺が、死を求めていた時に行き着いた場所。

俺は目的のものを探した。

しかし、ゲストでは目的地にたどり着けなかった。

そらそうだな。

簡単に入れてしまったら、あんなものを置いてはおけない。

パソコン通信からインターネットに変わっても、セキュリティは堅い。

ちなみにこのサイトも、あの外国の運営するホストに存在する。

どうするか。

俺は悩んだ。

あの頃のIDが、まだ使える保証は無い。

仮に使えたとしても、俺がアクセスした記録が残る。

未来計画のメンバーが、カズオとつながりが無いとは言い切れない。

ちなみにカズオとは、すもものご主人様を殺したと思われる、人物の呼び名。

呼び名は俺達が勝手につけたものだ。

呼び名が無いと、話しづらいからね。

仕方がない。

俺は、あの頃のIDとパスワードを使った。

さて、入れるかどうか。

ページは見事切り替わり、入場は許可された。

画面上には、「いらっしやいませ、死望さん。」と書かれていた。

死望とは、あの頃の俺のハンドルネーム。

懐かしいと共に、少し震えた。

おっと、もたもたはしてられない。

俺は目的のものを探す。

未来計画の会員が使用を許可されている、あるサイトのアドレスと、IDとパスワード。

あった。

サイトアドレスは、未来計画のサイトと同じドメイン。

つまりは、この閉ざされた国のサイト。

IDとパスワードを、メモした。

ただ紙に書いて持ち帰るだけなのだけど、俺は俺しか解読できないよう暗号化して書いた。

さて、すぐにログアウトだ。

俺はログアウトすると、ブラウザのキャッシュとログを全て消した。

更に用心をして、適当なサイトをいくつか回って、別のキャッシュを重ねる。

これで全てが消えているかは保証出来ないが、やらないよりは良いだろう。

全てを確認した後、俺はネットカフェを出た。

河崎邸に戻ると、俺はエナジー集めの為に、日記を書く。

PCを使った行動は、今日は終わりだ。

あまり焦って続ける事は、人物特定がしやすい結果を招く可能性がある。

はっきり言って、俺は臆病すぎると思う。

でも、もう二人の命もかかっているんだ。

臆病で良いんだと、自分に言い聞かせた。

今日の日記は、最後に「華ちゃんの未来日記が全て実行された。良かった。」と書いた。

簡単な行動ばかりだったから、華ちゃんもきっと簡単なものを書いたのだろう。

夜には見事に書いたとおりになった。

確認

未来ちゃんだけは、俺達とは違う所に住んでいるから、連絡は電話。

メールの使用は、基本禁止だ。

形として残るものは、使わない。

もちろん、電話も誰かに聞かれる危険があるから、自室で話すのは基本だ。

で、未来ちゃんには当面、三人の安全を任せている。

日記で書くなら、最後に、「俺達三人は、今日も一日無事終えた。また明日だ。良かった。」と書く感じ。

良かったと書くのは、まあ気持ちの問題。

書いた通りになっても、他が最悪だったら洒落にならないから。

さて、今日は昨日仕入れたIDとパスワード、そして未来計画の会員用通信サイトを使って、いよいよ未来日記を見る。

まずはPCを立ち上げる。

別のブラウザ、ネットスケープをインストールし、立ち上げる。

メジャーなIEは使わない。

未来計画通信サイトにアクセス、IDとパスワードを入れた。

入る事が出来た。

ブラウザの中に、別のブラウザが表示された。

今俺は、このサイトサーバーを経由して、どこかのサイトサーバーをクラックしている。

一言で言うと、未来計画の力で、誰かのコンピュータを、勝手に使っている状態だ。

つまり犯罪。

ただ、このホストを持つ国、或いは未来計画の管理者が情報を出さない限り、俺にたどり着く証拠は全く無い。

未来計画管理者は、マジシャンと呼ばれるほどの人物で、警察も密かに追いかけているらしいが、20年捕まっていないようだ。

おそらく日本にはいないと言われている。

だから俺の身は、国家権力と、マジシャンによって守られているのだ。

これで俺はヤフーにアクセスした。

コンピュータを経由している分、アクセススピードが遅い。

でもこうしているから、IPアドレスは別の数字になっている。

他人のコンピュータで、他人になりすましているんだ。

トップページが表示されると、俺は「日記 未来」と書いて、検索を押した。

二日前とは違うキーワード。

今度は五列目に、未来日記を見つけた。

さて、いよいよアクセスだ。

ココまでする必要は、もしかしたら無かったのかもしれない。

身元がわからなくても、こちらを殺る方法は存在するかもしれない。

でも、おそらく俺が用心してやった事は無駄ではなかっただろう。

俺はアドレスをクリックした。

トップページ、サブタイトルに書いてある文字で確信した。

「このページに書いてある事は、必ず実現する。魔女の力によって。」

自信が見える。

少し恐怖を感じた。

最近のブログを見てみた。

株に関係する日記が多い。

基本は、どの銘柄が大きく上がるとか下がるとか。

コメントを読んだら、それが全て現実になっている事がわかる。

おそらく今は、資金集めをしているのか？

古い記事も読む。

宗司「あっ・・・」

日記の中に、密かに書いてある一文。

「魔女を持つジョニーの死」

前日のブログコメントには、ジョニーと言う名の人コメント。

コメントを書いたから、IPアドレスがばれたから、身元がばれた可能性がある。

「魔女の力を、悪に使うな。制裁する。」

明らかに、これではばれるな。

人が殺されているのに、俺は安心した。

ココまでやってしまったから、殺されたんだ。

俺はこんな不用意には動かない。

とりあえずは、相手の行動の様子見だ。

そしてこちらのレベルをあげる。

俺は未来日記のブログサイトを出て、HOSTサーバーのホームページに移動した。

文字がバグって読めない。

中のイングリッシュの文字をクリックすると、全てが英語表示されたページに切り替わる。

英語でもわからないけど、JOINと書かれている部分を見つけ、登録する。

登録に必要なものは何もない。

それでHOSTスペースがかりられるのは、何をアップしても良い、サイトの自由性から来る人気。

人気は更により興味を引く内容を生み出し、広告塔としての力もアップする。

ココは完全な無法地帯であるかわりに、爆発的な人気を持つ。

俺はスペースをかりるための手続きを済ませた。

ココを使わずに、全てが済めば良いけど、おそらくいずれは使う事になるだろう。

とりあえず、今はエネルギーを集める事による、タイムアップを目指す。

みんなでレベル3になれば、魔女っ子はお別れとか言っていたから。

みかん達との別れは寂しいけれど、カズオの王国で生きるよりは良いはずだ。

まあそんな事を、カズオが許すとは思わないけど。

みかん「ん、宗司、もう起きてたのさ。」

みかんが目を覚ました。

今日も俺は、エネルギーを集める為に、一日を過ごした。

展開と行動

みかんとゆずのレベルが2に上がっていた。

ココまで来るのに一ヶ月を要した。

思っていたよりも早かったが、喜んでばかりもいられなかった。

俺達は今日、朝早くから河崎邸の俺の部屋に集まっていた。

昨日の日記でどうしても見過ごせない事が書いてあったから。

「日本国総理大臣、皆川昇氏の死。」

いよいよ、未来日記が本格的に動き出すのか。

皆川総理大臣なんて、俺は正直死んでもかまわないと思っている。

ここ二年総理を続けていて、なかなか人気の総理大臣だけど、冷静に見れば、結局何もしていない。税金を上げない。

これだけの事で、国民は皆支持するんだ。

他にもまああるけど、日本の腐った部分に手を付ける事はない。

政治家全てとは言わないが、選挙で勝つ事と、金を儲ける事が最優先なのだ。

国を良くするなんて事を思っている政治家は、もう俺には見えない。

政治家なんて、俺は国民の使いっぱで良いと思っている。

ボランティアでも国を良くしたいと思う人の集まりであるべきだ。

まあ、俺一人が何か言っても、もうどうにもならない世の中だけど。

学生運動とか、大規模なデモなんか、本当はもっとあっても然るべきだと思う。

日本人は平和ボケしたもんだ。

宗司「平和は、良いことなんだけどなあ。」

華「やっぱり平和がいいよねえ〜」

いろいろ政治家批判してみたが、平和である事で、きっと全てが許されているんだ。

平和は、何ものにも代え難い、大切な事だから。

ココだけは、俺も政治家に感謝しないとイケないだろう。

宗司「ところで、未来ちゃん、こんな朝早くから悪いね。」

俺は、朝一の電車でココまで来てくれた未来ちゃんにお礼を言う。

未来「い、いえ、私は、みんなと、一緒の方が、良いですから。」

確かに、俺達三人のうち一人が、離れた所に住んでるのは、いろいろと面倒だ。

華「じゃあ、ココに住んだらあ〜？」

・・・やけにあっさりだな。

金持ちとは実に心が大きい。

でも、俺は金持ちを否定してきた。

華ちゃんの両親も、俺が嫌いな金持ちなんだろうか？

この世は金持ちが金持ちになる世界だ。

資金があれば、いくらでも増やす事が可能。

もちろんリスクもあるけど、慎重にやればいけるだろう。

それなのに、金持ちは更に金を欲する。

会社の上層部は、最下層の人達が、どれだけ苦しんでいるか知らない。

もしくは、知っていても、助けるどころか更にその身を削る。

いやだいやだ。

そんな嫌な金持ちの傘の下、俺はノウノウと暮らしている。

やはり、この事にけりをつけたら、俺はココを出るべきだろうな。

未来「う、うん。でも、いいの？」

華「いいよお〜。大歓迎だよお〜」

未来「じゃ、じゃあ、お願い、します。」

どうやら、未来ちゃんも、この河崎邸に住む事になったようだ。

自分が住む事は、今否定していたのに、未来ちゃんが住む事には、肯定の気持ちになっていた。

未来ちゃんの家は、あまり裕福ではない。

金持ちがそういった人の生活を助ける。

良い事じゃないか。

勝手な事を思う自分に、苦笑いがでた。

さて、俺は本題を話す事にした。

宗司「今日集まって貰ったのは、もちろん未来日記の事だ。」

皆真剣に、息をのんで俺を見る。

宗司「見過ごせない、事が、とうとう書かれた。今日、総理大臣を殺すそうだ。」

みかん「総理大臣は、日本のボスなのさ。」

何故、日本の総理大臣を殺すのかはわからない。

もしかしたら、俺と同じように、政治に不満があるのかもしれない。

それでも、殺しはダメだ。

カズオが、日本人である事は既に予想できる。

ブログが日本語で書かれているから。

華「怖い・・・」

未来「う、うん。」

ゆず「止めるのですか？」

・・・

どうすべきか。

宗司「それを今から、話し合いたい。」

すもも「危険やで。動いたら、うちの存在がばれる可能性あるからな。」

そう、一度動いてしまっただけでは、もう衝突は避けられないかもしれない。

しかし、人が一人殺されるのを、黙って見ていて良いのだろうか？

おかしいな。

少し前の俺だったら、明らかにこんな考えは無かったはずだ。

逆に、カズオを応援していたかもしれない。

考え方とは、ふとした事で、180度変わるもんなんだな。

宗司「そこで、まず、未来ちゃんに、その未来を変える最良の未来を調べてほしいんだ。」

未来ちゃん的能力は、既にレベル3、カズオと同等の力を持っているんだ。

そしてそれ以外に、俺と華ちゃんもいる。

こっちの方が有利のはずだ。

未来「ちょっと、まって、ください。」

未来ちゃんが目をとじて、頭の中で日記を編集してゆく。

ちなみにココケ月、善意と悪意の日記を、色々とシミュレートしてもらった。

それでわかった事は、善意なら全てを知らずとも、目的を達成する事が可能。

今回の場合はこうなる。

未来「えっと、17時32分33秒に、赤坂見附駅前246の信号を渡る。これだけで良いみたいです。」

意味が分からなくても、それで達成する事ができる。

これがもし、殺す立場だったら、おそらく皆川総理の予定を把握するのはもちろん、他にもかなりの情報や力が必要だ。

未来ちゃんに、誰かを殺すシミュレートをしてもらっても、実際に実現できそうな事は全く無かった

から。

それでも、知ってる俺を殺すシミュレートなら、難しいものの、不可能では無かった。

宗司「なるほど。未来ちゃんがその信号を渡る事によって起こる何か、それによって向こうの計画が崩れるんだな。」

しかし、そんな事を未来ちゃん自ら行っては、かなり危険だ。

宗司「じゃあ、次は華ちゃん、日記を想像してみて。」

今度は華ちゃんにシミュレートさせる。

おそらくはかなり難しい事になると思うけど、これと未来ちゃん、そして俺のをあわせれば、具体的に何が必要なのかわかるかもしれない。

華「えっとお～、まず、私は赤坂見附に遊びに行くよお～。友達を連れてってなってる。で～、カラオケで4時間歌うんだってえ～」

赤坂見附。

共通している。

華「歌い終わった後、友達と別れて、渋谷に歩いて向かうんだってえ～。で、楓屋で、予約していたCD買ってえ～、あ～そうであ～私予約してたんだあ～」

渋谷まで行ってしまうのか。

華「後は家に帰って～、ニュースで、総理大臣が出てて、生きてる事を確認して、命が助かった事を知るみたいだよお～」

・・・

うむむ。

確か赤坂見附から渋谷まで、国道246号があるんだよな。

もしかしたらその途中で何かがあるのだろうか？

宗司「じゃあ、俺もやってみる。」

俺がやった場合も、華ちゃんと概ね同じ感じだった。

俺の場合は、渋谷から赤坂見附の方へ、走っているだけ。

おそらくこの間で何かが起こるに違いない。

みかん「どうするのさ？」

宗司「ココは、俺だけで行く。」

三人一緒の行動は、おそらくまずいだろう。

それに今回のミッションは、さほど難しくはない。

なんせ、渋谷から赤坂見附まで走るだけだ。

華「大丈夫かなあ～？」

未来「宗司さん、だけ、危険にあうかも・・・」

宗司「だから、未来ちゃんと華ちゃんは、みんなが無事生き残るように、行動して欲しい。」

そう、たとえ俺が危険な状況になったとしても、二人が生き残れるよう未来日記を作れば、俺は助かるのだから。

未来「とりあえず、無事に、帰って、来る事は、簡単に、できそうです。」

未来ちゃんがそう言うなら、おそらくは無事戻ってこれるだろう。

少し安心した。

接触と宣戦布告

夕方、日記をこなし、最後の渋谷から赤坂見附に走るところ。

はたして、一体何があるのだろうか。

俺は、私服のまま走るのは違和感があるので、短パンとランニングシャツに着替えている。

必要最低限は、背中に背負った小さなナップサックの中。

それ以外は、渋谷駅でコインロッカーに入れた。

走るのは結構しんどかった。

やはりタダのニートにマラソンは自殺行為だったか。

それでも俺は、へろへろになりながらも走る。

赤坂見附駅まで行かなければ、おそらく総理大臣が殺されてしまうのだ。

未来ちゃんの未来日記によれば、俺はおそらく18時くらいまでには赤坂見附駅に着くだろう。

17時半を過ぎた辺りで、きっと何かが起こると予想される。

俺の走るペース、現在の時間も加味して予想した結果だ。

それでも、最短で後30分は走るのだ。

しんどい・・・

みかん「頑張るのさ。」

チラッとみかんを見た。

一瞬、みかんが飛んでいたら、カズオにばれるんじゃないかと思ったが、よく考えたら見えないのだ。

そして、俺とカズオが出会う事も無いらしい。

どういうシステム、どういった力でそれを妨げるのかは知らないけど、そのへんは安心だ。

何とか、9割方走りきった。

後少しだ。

赤坂見附にあるでかいビルは、俺の視界にもすでに入っている。

もう少し・・・

その時だった。

宗司「うっ！」

なんだか突然に、疲れが出てきた。

いや、何か不思議な感覚で、身動きが苦しくなった。

俺は立ち止まり、その場にしゃがむ。

みかん「どうしたのだ？うっ！こ、これは、きっと、近くにカズオと魔女っ子がいるのだ・・・」

ああ、そうか。

これ以上進むと、俺達は出会ってしまうから、ココで身動きを止められているって事か・・・

みかん「そ、そうなのさ・・・」

って、これってやばくないか？

こっちが感じているなら、向こうも同じ感覚を味わっているって事だ。

俺は力を振り絞って、立ち上がると、来た道に戻った。

そしてすぐに脇道に入った。

さっきの苦しさは、不思議なくらいあっさりと無くなった。

直後、遠くで爆発音が聞こえてきた。

俺は必至に逃げた。

総理大臣を助けようとしたけれど、カズオとの接近に俺は怖くて逃げてしまった。

これでカズオは、魔女っ子のご主人様が、近くにいる事を知っただろう。

それにしても、まさか本人が、殺害現場近くに来ていたなんて。

総理を殺すには、それくらいしなければ無理だったって事だろうけど、今回はやられた。

なんとか走って走って、俺は渋谷まで戻ってきていた。

正直、赤坂見附に向かっていた時より、早く戻ってこれた気がする。

恐怖が、俺に妥協を許さなかったのだろう。

全力で走って戻ってきていた。

俺はロッカーを開けて、荷物を出すと、トイレに入って着替えた。

これで、もし赤坂見附辺りで、カズオの仲間に見られていたとしても、大丈夫だ。

まあ、仲間がいるかどうかはわからないけど、一人で総理大臣を殺れるとは思わない。

おそらく、人や金、権力を必要としたはずだ。

俺は最近気がついてる。

この能力は、自分の裁量を越える事は達成しづらい事を。

おそらくだけど、カズオがずっと、株価の上下を予想する未来日記を書いていたのは、金を稼いで、力を手に入れ、人を動かす事ができるようになるため。

そして今、それなりの力を手に入れたのだろう。

少し震えた。

河崎邸に、俺は無事生還した。

未来「お、お帰りなさい。」

華「おかえりだよお〜」

ゆず「おかえり。」

すもも「おかえり。」

皆、笑顔だけど、無理に笑顔を作っている感じだ。

俺が無事な事は、おそらく未来ちゃんならわかっていただろう。

宗司「ただいま。少し、まずい事になった。」

俺は笑顔は作れなかった。

華ちゃんに促されるままに、俺達はリビングに集まった。

そこについているテレビには、「総理殺害」の文字がおどっている。

やはり、俺は止められなかったんだ。

俺達は皆でソファーに座り、ただただテレビを見ていた。

俺があのまま走っていたら、未来ちゃんがあ時間に信号を渡っていたら、このニュースはきっと実現されなかった。

しかし、実現してしまっているのだ。

怖い。

恐怖が俺を襲った。

華ちゃんも、未来ちゃんも、おそらく感じているはずだ。

ココで、俺だけがカズオに殺されれば、この二人はこっそりと生きていく事ができるかもしれない。

カズオが牛耳る世界であっても、きっとこの二人なら、幸せに暮らせるんじゃ。

みかん「だめなのさ。おそらくそれは無理なのさ。みんなきっと、悪い事を、見て見ぬ振りなんてできないのさ。」

宗司「そんな事は、無いだろ。俺は今まで、そうやって生きてきたんだから。」

俺は、悪いとわかっている事でも、上司の命令なら従うし、私利私欲の為にそうしてきた。

みかん「でも、今はもう無理なのさ。」

そうなんだ。

なんとかできるかもしれない力を持ってしまったから、俺はきっと抗いたいと思っている。

華ちゃんと未来ちゃんも、きっとそう思っているだろう。

何故なら、今俺を笑顔で見ているから。

宗司「よし、落ち込みは終了だ。今日の事と、これからの事を話す。俺の部屋にきてくれ。」

華「うん。がんばっちゃうよお～」

未来「は、はい。」

すもも「偉そうやなあ。」

ゆず「うん。」

みかん「あいあいさー！」

みんながいるんだから。

なんとかかなりそうな気分になった。

とりあえず、俺の部屋に入ったらまず、テレビをつけた。

どのチャンネルも、総理殺害のニュースばかりだ。

テレビはつけたままで、俺は今日の事を皆に話す。

宗司「まず、渋谷から赤坂見附をめざして走るところまでは、順調だった。」

俺は皆の顔を見回す。

皆真剣な顔だ。

宗司「しかし、赤坂見附まで後少し、おそらくは5分も必要でない距離まで来た時、俺は意味不明な苦しさに襲われた。」

ゆず「えっ？疲れが一気に襲ってきたとか？」

まあ、普通ならそういった理由しか考えられない。

後は本当に、久しぶりの運動による体調不良。

宗司「いや、そうじゃなかった。」

すもも「もしかして、カズオが近くにいたんか？」

すももの言葉に、ゆずは理解する。

ゆず「あっ・・・」

華「ええ？会えないんだよねえ～」

未来「ど、どうして。」

宗司「正確には会っていない。どうやら近づくと、苦しくなって、それ以上近づけなくなるらしい。」

だから、カズオが側にいた事になる。

すもも「正確には、苦しくじゃなく、いろいろな方法やけどな。」

なるほどね。

近づけない為の、手段の一つってわけか。

宗司「こちらが気づいた以上、おそらくは向こうも気がついたと考えていいだろう。」

華「いよいよ、なんですね・・・」

未来「う、うん・・・」

これで、向こうは俺を、もしくは魔女を持つ者を、探しにかかるだろう。

そして消そうとするのだろう。

しかし、まだ相手に情報を与えたわけではない。

あえて言うなら、東京近郊にいるのではないかと思われているくらいか。

みかん「今後、きっとみんなの事を探したり、調べたりしてくるのさ。」

宗司「そういう事だな。」

ゆず「じゃあ、こちらも調べるのですね。」

そうだな、ガチで勝負するなら、それで確実に勝てる相手なら、それも良いだろう。

でも、相手はできうる限りの準備を既に終えている。

俺達はまだまだだ。

この能力を完全に使いこなしているとは言えないし、力もない。

お金だけなら、華ちゃんからなんとかなるかもしれないけど、力は流石に無理だろう。

宗司「調べはするが、基本は向こうがボロをだすのを狙う事にする。」

みかん「消極的なのだ。」

宗司「こちらが不用意に動いたら、それこそそこからばれる。これは、どちらが先に、相手が誰だか探る戦いでもあるんだ。」

すもも「それこそ一気にしらべたったらええやん。」

宗司「ダメだ。わかったとして、俺達がすぐに行動にうつせるとも思えない。長期戦でいく。」
圧勝で、この勝負は勝たないとならない。

「総理殺害を予想していた、未来日記というブログサイトが注目を集めています。」
テレビから、そんな言葉が聞こえてきた。

俺達は、一斉にテレビを見た。

テレビには、ブログサイトが映し出されている。

俺が昨日見た、今日の未来日記が書いてある。

これでは、本当にデスノートみたいだ。

しかしこれは、殺すだけではない。

いろいろな事を実現できるのだ。

少しずつ階段を上れば、本当に世界を牛耳る事もできると本気で思う。

テレビでは、与党議員が、テロには屈しないとかが言ってるけど、このサイトを全て見て、本気でそんな事が言えるのだろうか。

おそらく書いてある事は、全て実現されているはずだ。

次、もしも何かがあったら、政治家は確実に屈すると俺は思う。

こうなったら、仕方がない。

政治家が言いなりになる前に、やるしかない。

華「このままだと、まずいよねえ〜」

みかん「お偉いさんは、みんな言いなりになりそうなのだ。」

宗司「その前に、一度は逆らうだろうけどな。サイト調べたり、罠をはったりするはずだ。それで捕まえてくれれば良いけど。」

俺はPCを立ち上げた。

いつもの手順で、未来日記のサイトに繋いだ。

重い。

アクセスが集中しているようだ。

それでもなんとか、ページを表示。

昨日書いてあった文章の下に、追加分があった。

「まだ、いたとは驚きだ。魔女を持つもの、いずれ消す。」

やはり、気がついてたようだ。

俺は決意した。

某国のサイトにキープしていたスペース。

俺は、そのスペースを少し書き換えた。

俺のブログサイトが立ち上がる。

名前は、未来日記。

既に、この名前で検索すれば、このサイトもサーチエンジンに引っかかるはずだ。

サイト名未来日記で登録し、その文字を見えないように細工していた。

今それをオープンにしたらだけ。

サブタイトルには、「未来日記の悪意を砕く新未来日記。」と書いた。

宣戦布告だ。

みかん「それでいいのか？」

すもも「こちらの意志をはっきりする必要性ってあるんか？」

宗司「このサイトがあれば、カズオは計画だけに力を入れられないし、政治家や権力者も、あっさりとは屈しないと思う。」

敵対する事を宣言する事は、正直怖い。

でも、どうせ向こうは敵だと思っているんだ。

こちらにデメリットは無い。

最初の日記は、「私は、未来日記の計画を砕きます。」と書いた。

しかし思い直して、「俺は、未来日記の計画を砕きます。」と書き換えた。

これは、あえて俺が男である事を主張する為。

送信しようとした。

華「まってよお〜。達だよお〜。」

未来「そ、そうです。俺達ですよ。」

二人の気持ちは嬉しかった。

でも、ココは譲れない。

宗司「ありがとう。でも、ココは俺だけだと思わせた方がいい。それが武器になる可能性も十分あるから。」

俺は笑顔でそう言ってから、アップボタンをクリックした。

駆け引き

次の日の朝のテレビは、更に大変な事になっていた。

まずは、これをテロと捕らえて、アメリカをはじめ、全世界が注目していた。

未来日記のあるホストがある国、南サファリ共和国へ、アクセスログデータを要求する国々が騒ぐ。

南サファリって国名だったのね。

日本以外では概ね騒ぎはそんな感じだ。

日本では、未来日記の内容に注目が集まっていた。

株価が全て予想どおりに、いや、予告どおりに動いている不思議、更には他の事柄でも全体的中している。

日付が全てずれているんじゃないかとも言われたが、前々からこのサイトを観覧している人が、証人としてテレビに出ていた。

魔女と言う言葉が書かれている事から、これが魔法だと騒ぐ番組もあった。

そして魔法を使い、金儲けをした後、ゲーム感覚で人を殺し始めたと考える人も多かった。

突拍子もない推測ではあるが、そうでも言わないと説明できない事が多いようだ。

警察も一応、この株価の推移にあわせた取引をしている人を割り出すために、各証券会社に協力を依頼していた。

それで見つかればいいけど、サファリ国のサーバを使っている人だ。

無駄だと思った。

宗司「無駄？」

少し引かかった。

俺も、この予告どおりに金を稼いで、そして今動き出したと思っていた。

でもそれを日本でやっていれば、ある程度個人を特定できる。

海外だとしても、かなりの国が、今回の事に注目してるんだ。

いずれ割り出されるのではないか？

だとすると、株取引はしていない？

もしくは、別の人に代わりにさせている？

もし、していなかったなら、カズオは元々、総理を殺害できるだけの権力や金を持っていた事になるのでは？

まあそれがわかったところで、俺には割り出せないだろう。

でも確信が持てれば、突破口に使えるかもしれない。

俺は一応記憶しておく事にした。

さて、今回の事件を、面白おかしくと言ったら語弊があるけど、それに近い放送をしているテレビ局へと、チャンネルを変えた。

この局だけは、未来日記と、俺が立ち上げた未来日記を取り上げていた。

俺の未来日記サイトは、新未来日記と呼んでいた。

未来日記には、昨日書いたのであろう日記が書かれている。

「未来日記？魔女の主人か？返事を望む。」

今日の記事はそれだけだった。

今日は未来への予告は無い。

俺に対しての質問だけ。

どうやら、俺のサイトを気にしてくれているようだ。

俺は、とりあえずPCを立ち上げて、未来日記に繋ぐ。

ココにはやはり書き込めない。

未来計画のシステムで、俺の身元は隠されてはいるけど、誰かのコンピュータから繋いでいるんだ。

間違ったら、その人に迷惑がかかる。
今更だけど、できるかぎりの事はしよう。
俺は自分のサイトに繋ぎなおした。
さて、どう返事すればいいか。
それともしないほうがいいか。
返事を希望したのは、コメントからIPアドレスを割り出す為。
こちらに書く分には、おそらくは大丈夫だろうが。
おっと、危ない。
今書いたら、時間から割り出される可能性がある。
アクセスログはとってるだろうからな。
俺はブラウザをとじた。

今日はまず、未来ちゃんに、カズオが何処の誰だか割り出す為に、必要な要項を調べて貰う。
あらゆる流れをシミュレートしていれば、何かあるはずだ。
俺達は善意のつもりで行動からだけど、これは悪意。
いずれ殺さなければならぬ人の身元を、調べているのだから。
だから簡単にはいかない。
おそらく向こうも同じように考えているんだろう。
それでもおそらく、向こうの方が簡単なはずだ。
何もかもが向こうが上だから。
こちらの利点は、三人いることだけ。
未来ちゃんの裁量では、カズオを割り出す術がみつからなかった。
とにかく無茶な要求をいくつもこなさないと、個人を特定する事も不可能らしい。
おそらく華ちゃんも無理だろう。

宗司「じゃあ、俺もやってみる。」
心の中で、結果を創造する。
こちらの情報を一切漏らす事なく、更にはそれにつながる痕跡も残さない。
それでいて敵を知る術。
やはり無理だ。
こちらにも悪意がある以上、簡単では無い。
しかも俺はまだレベル2だ。
いろいろな状況を考える事は不可能。
俺は思う。

このままでは、絶対に俺達より先に、向こうが俺を見つけ出す。
悪意がある事を、あれだけ実現してるんだから。

宗司「あっ！」
みかん「どうしたのさ？」

俺は気がついた。
これだけ難しい事。
株価の上下だけでも、それは難しいはずだ。
それを簡単にやっていた。
それはすでに、それだけの力を持ってたって事だ。
株の予告はフェイクだ。
あれで金を儲けているなんて、あり得ない。
すでに金は余る程の金持ち。
そして、株価操作できるだけの力を持ち、それを行った人物こそ、カズオだ。

宗司「よし、今日も華ちゃんはレベルあげ、未来ちゃんは俺達の安全確保。これでよろしく。」

みかん「宗司何かやるつもりなのさ。」

華「危険な事は控えてよお〜」

ゆず「うん、焦りは禁物だよ。」

宗司「ああ、俺もレベル上げだ。ただ、ネットに少し書こうと思ってね。警察に情報を流す。」
身元は、俺達が見つかるよりも、警察に任せた方が安全だ。

俺はパーツを探して、それを提供する。

まだ時間はあるはずだ。

この日俺は、一つの日記を行動し、夜に自分の未来日記に書き込みをした。

「未来日記管理者は、日本人であり、古くからの金持ちであり権力者である。株価上下の予告は、管理者の裁量で可能な範囲だ。」

これで、株価操作をした人が見つければ、カズオにつながるかもしれない。

そしてもう一文。

「未来日記管理者は、昨日赤坂見附近辺にいた。」

結局のところ、この二文は、既に皆承知している事かもしれない。

しかし、政府には安心感を与えるだろう。

この文で、魔法の力が無くても、起こり得る事だったと思えるはずだ。

既に、俺は魔法だなんて思ってないけど。

あえて言うなら、無駄な努力と不安をかき消す魔法。

善意だと完全に魔法だと言えるけどね。

宗司「疲れた・・・」

みかん「気を張りつめ続けてるからなのだ。」

そういえば最近、最初にココで目覚めた時のような、爽やかな目覚めをしていない事に気がついた。
頭の傷はいつの間にか治っているけど、あの時の目覚めが恋しくなった。

二度目の接近

俺の書き込みが効いたのか、日本でもあれはタダのテロだと思われるようになっていた。

魔女という言葉に気にする者は少なくなった。

とりあえず、現状では良い傾向だ。

政府や警察が手をあげてしまっっては、正直俺達だけで対抗するのはきつい。

全ての朝の準備を済ませると、俺は一人、PCを立ち上げる。

今日から学生は二学期で、華ちゃんと未来ちゃんは学校だ。

夏休みが終わっているって事は、俺の誕生日もいつのまにか過ぎ去っている。

俺の誕生日は、8月だからな。

それだけ未来日記や、魔女っ子の事に集中していたって事。

宗司「俺も二十歳かぁ・・・」

なんとなく言葉に出した。

てことは、年金なんかも払わなくてはいけない歳だ。

きっと実家には、その旨伝える何かが届いているのだろう。

しかし俺は、収入なんて無いし、そんなものは払えない。

働こうにも、今は世界を守る事で手一杯だ。

おっ！俺なんか格好いい。

それよりも、今は未来日記だ。

みかんが寝ている間にやらないと、五月蠅くて邪魔だからな。

もう10時過ぎてるけど。

まずは、未来日記を確認。

カズオは、毎日夜に一度だけ更新する。

それを俺は朝確認。

これはもう日課になっていた。

確認したが、今日は大した事は書いていなかった。

といっても、悪意のある事が書いてあるから、本来ならとても重要な事なんだけど。

まあ、多少大きな金が、理不尽に動く程度だ。

やばいな、完全に最近金銭感覚麻痺しているかも。

続いて自分の未来日記サイトに繋ぐ。

本家には負けるが、毎日多くのコメントが書かれている。

大概が質問と応援。

応援って言っても本気のものでは無い。

野次馬が冗談半分で書いているものばかりだ。

さて、俺も書き込みは夜に行う事にしている。

朝未来日記を見た直後に更新すると、アクセスログと時間から割り出される危険があるから。

まあ、前にも言ったとおり、誰かに迷惑がかかる。

俺はみかんをつついた。

みかん「う、うーん。朝なのだ？」

宗司「いや、もうすぐ昼だ。」

みかん「なんですとー！」

みかんは文字どおり飛び起きた。

みかん「朝は早く起きないと、一日が短くなるのさ。」

一日の長さはかわらないけどね。

宗司「今日は俺も出かけるから、そろそろ準備するぞ。」

そうなのだ。

俺は今日、ある場所へ行く事を強要された。

いや、正確には頼まれたただけだけど、それが可愛い女の子のお願いで、しかも日頃お世話になっている人であるならば、断れるはずがない。

姫が、政界財界のお偉いさんの集まるパーティに参加予定で、俺と一緒に来てくれと頼んできた。

本当は華ちゃんと一緒に行く予定だったのだけど、学校があるから行けないとの事。

休んで行けば良いのかもしれないけど、華ちゃんは嫌だったから、学校をネタに断ったって事だ。

パーティは、総裁選を控えた与党の候補者の、顔見せやアピールが目的らしい。

確かに華ちゃんが行ってもむだだし、姫だってまだ18歳。

まあそう考えれば、俺が行くのが一番なのだろう。

準備を済ませて、昼食をとった後、俺は姫と合流。

宗司「姫、マジで行くのか？」

姫「しかたないでしょ。お母様が出るって言うのですから。」

姫の母の名前は、三輪星子。

日本で第三位の総合商社、三輪商事社長。

話を聞いて金持ちの理由がわかった。

ただ、名字が違うのは、姫が父方の名字を名乗っているから。

戸籍上はそちらが正しい。

ただ、会社名から、母は旧姓で呼ばれる事が多く、わかりやすいからそちらを名乗っているらしい。

河崎邸内まで、迎えの車がきていた。

リムジンとは言わないけれど、高そうなオーラを発している外車だ。

俺は少し緊張して乗り込んだが、姫はいつもどおりだ。

みかんは車内を飛び回って、よくわからない歌を歌っていたが、まあみんなに聞こえないから良いだろう。

って、五月蠅いよー！

姫「どうかしました？頭を抱えて。」

俺が耳を塞いで俯いていたら、姫が心配してきた。

宗司「いや、ちょっと空耳な雑音が、俺を襲ってきたただけだよ。大丈夫大丈夫。」

みかん「なんだとー！私の歌は雑音かい！」

そうだよ。

それ以外どう表現したらいいんだよ。

みかん「くっきいー！！」

みかんが俺の頭をけ飛ばし始めた。

宗司「痛い、痛い！」

姫「だ、大丈夫？今日は行くのやめましょうか？」

や、やばい。

宗司「いや、今治ったから、大丈夫。」

俺はみかんが頭を蹴る痛みを我慢しつつ、平静を装った。

てか、もともとあまり痛くはないんだけどね。

姫「そうですか。もしダメなら、言って下さいね。」

う、マジで心配してくれてる。

ああ、なんと素晴らしいのだろう。

心配されるなんて、そんな体験が今までの俺に有っただろうか？

宗司「うん。ダメならちゃんと言うよ。」

みかんが蹴る頭の痛みが心地よかった。

30分ほどで、虎ノ門のどでかいホテルに到着した。

ココの2階で、パーティがあるらしい。

車を降りる。

かなりドキドキしてきた。

俺みたいなパンピーが、でも大丈夫なのだろうか？

いやでも、姫みたいに可愛いお嬢様がいっぱい集まっていて、結構楽しい合コンみたいになったりして

。おっとやべ、少し妄想の世界にトリップしそうになったぞ。

姫「じゃあ、いきますわよ。」

宗司「お、おう。」

今日の姫は、ずっとお嬢様言葉だ。

流石に今日は仕方のないところなのだろう。

俺は地下の駐車場から、エレベータで二階に向かう。

エレベータに乗って、二階に到着。

俺は急にトイレがしたくなった。

大ではない。

小だよ？

本当だよ？

宗司「姫、俺、手洗いに行きたくなった。先に行ってくれ。」

姫「わ、わかりましたわ。」

姫はそういうと、一人で部屋へと向かった。

俺は逆方向に歩く。

あれ？

さっきあれほどトイレしたかったのに、今は全くもって大丈夫だ。

おっかしいな。

俺はトイレをせずに、そのまま会場に向かおうとした。

宗司「うっ！あれ？またすげえトイレしたくなった。」

みかん「もしかして、ココに魔女っ子がいるのかも。」

あり得る。

それもカズオがココにいる可能性もあるじゃないか。

日本人で金持ち。

今日はそんな人がココに集まっているのだから。

俺は走ってトイレに駆け込む。

やばい、おそらくこれがカズオへの接近を拒む現象だとしたら、カズオも俺が近づいた事に気がついて

いる可能性が高い。

どうする？

少なくとも、同じ会場に入る事は不可能だ。

俺は帰るしかないだろう。

しかし、もしカズオが俺に気がついていたら、部下か誰かに、俺を捜させているかもしれない。

みかん「どうするのさ。早く決断しないとまずいのさ。」

その時、ポケットに入れてあった携帯が震えた。

着信。

俺は携帯のディスプレイを見る。

相手は、未来ちゃんだ。

俺は周りに人がいない事を確認し、電話に出る。

宗司「もしもし？」

未来「宗司さん、逃げてください。大丈夫です。逃げ切れますから。」

宗司「ああ、姫への連絡は・・・」

未来「華ちゃんにしてもらいます。大丈夫です。」

宗司「わかった。」

俺は電話を切ると、頭の中で日記を書いた。

無事、河崎邸に帰る為の日記を。

宗司「な、なんだ？かなり困難だ。」

みかん「悪意でも善意でも無い事だけど難しいなら、普通にやれば現状かなり困難な事なのさ。すでにカズオが手を打って何かしらしてるのさ。」

俺に気がついて、ホテルの周りや駐車場を見張っている？

まあ、未来日記どおりにやるしかない。

俺は、トイレの窓を開けた。

会場が二階で助かった。

もし最上階とか言われたら、俺はきっと今日ココでカズオに捕まっていたか、それとも殺されていたかもしれない。

少し震えた。

いや、かなり震えた。

二階とはいえ、かなり高い。

俺はココから飛び降りなければならない。

おそらくは無傷で降りられるのだけど、やはり怖い。

俺は意を決して飛び降りた。

下はふわふわの芝生で、衝撃は緩和されていた。

これが普通にアスファルトだったら、捻挫とかしていたかも。

そんな事を考えている場合ではなかった。

塀の向こう側で、なにやら声が聞こえる。

男A「ホテルから出る者は見逃すな。追跡する。」

男B「はい。」

見つかったらといって、すぐ殺されたり、捕まえられる事は無いようだ。

まあ、ホテルから出る人間なんて何人もいるだろうからな。

とにかく俺は、ホテルの敷地内を少し移動する。

裏手なので人目は無い。

まもなく目的の場所まで来た。

下水道へと誘う、マンホールという名の入口。

俺はその横の、網目の方に指を突っ込んで、それを持ち上げた。

あいた。

俺はうまく中へと入って、網目のやつを元に戻す。

鉄のハシゴをつたって、俺はドンドン下へと降りていった。

俺が河崎邸に戻ったのは、既に日付が変わろうかという時間。

つまり0時前。

下水道を闇雲に走り回って、ドロドロになりながらたどり着いたのは、川へとつながる通路。

そこから出たところすぐにある公園で身を隠していた。

流石にこんな格好で、河崎邸には帰れない。

そこに、先ほど華ちゃんが迎えに来てくれて、一度俺から逃げた後、再び近寄ってきて。

夜中の公園で裸になって、公園の水道で体を洗うなんて経験ができるとは思ってなかった。

宗司「ふう～、やっと落ち着いた。」

俺は風呂に入って、みんなが集まるリビングに向かった。

さて、今日の事を、皆に話さなければならない。

俺も聞きたい事があるし。

宗司「今日、パーティ会場で、カズオと接近した。俺は魔女っ子の力で出会う事はなかったが、明らかに向こうは気がついて、俺を捜していた。」

みかん「そうなのさ。でも、無事戻れて良かったのさ。」
本当だ。

きっと俺一人だったら無理だっただろう。

宗司「未来ちゃんが助けてくれたんだよね？」
おそらくは、未来ちゃんの未来日記によって、俺は助かったのだ。
俺が逃げるのは、善意でも悪意でもないけど、未来ちゃんが俺を助けるのは、明らかに善意。

未来「う、うん。学校から戻って、いつもの、みんなの無事を、書いたら。」

宗司「一応、何をしたか、教えて貰ってもいいかな？」

何をしたかは、重要だ。

未来ちゃんを信じていないわけではないけど、どこかにつけ込まれる隙があってはいけない。

未来「まず、宗司さんに、逃げるよう、電話しました。」

これはもちろん知っている。

これで俺は、安心して逃げる事ができたんだから。

未来「その後、華ちゃんに、電話しました。姫さんに、電話するように。」

華「うん。宗司さんは頭が痛いから、帰るって。後は、今日は最初から、一人できた事にしてくれて。」

うん、これだったらおそらく大丈夫だろう。

もしかしたら、カズオが、もしくは命令をうけたものが、会場の人に、つれがいたかとか聞かれていたら、やばいもんな。

姫が最初から一人だったとこたえれば、俺につながる道は少なくなる。

ホテルの地下にいたガードマンとかに覚えられていて、聞かれたりするとまずいけど。

未来「後は、夜に、公園に、迎えにいくだけです。」

宗司「ありがとう。これなら、なんとか大丈夫だろう。」

しかし、かなりの絞り込みが可能になってしまった。

今日集まった人の関係者の中に、俺につながる人がいる。

逆に、カズオもいる。

姫「あら、宗司、もう頭痛は大丈夫なの？」

姫がリビングに入ってきた。

皆視線で、この話は終わりだと目配せする。

でも、俺は姫に聞く事にした。

宗司「姫、ちょっと聞きたいんだけど。」

みんなが驚いていた。

華「えっ？いいの？」

みかん「どうせ記憶は消えるのさ。」

みかんが俺の代弁をしてくれた。

記憶が消えるんだから、今聞いていても問題ない。

姫「ん？何かな？」

宗司「ああ、今日のパーティの事だけど。」

姫「ああ、退屈だったよ。次の総理大臣に興味も無いし。」

そう言えば、次期総理候補が集まっていたんだよな。

よく考えたら、凄く危険な場所じゃないか。

でもまあ、予告してなかったし、カズオの性格ならいきなりはないだろう。

なんとなくそう思った。

宗司「てかさ、今日誰かから、ツレがいるかとか、一人で来たのかとか、聞いてくる奴はいなかったか？」

姫「ああ、それは毎回聞かれるわよ。」

・・・

くそ、姫がへたに可愛いのが災いしたか。

宗司「若い男に聞かれるって事ね。」

姫「だから、宗司に頼んだのに。」

なるほど。

俺は害虫よけだったのか。

でも、これでは、特定はできない。

俺は魔女っ子の事を話す事にした。

話し終えたが、姫は全く信じていなかった。

証拠になる魔女っ子もノートも見えないのだから。

宗司「信じてもらえなくてもいいから、そうだと仮定して、俺が狙われてると仮定して、今日、ツレがいないかどうか聞いてきた中で、おかしいと思う者はいなかった？」

姫「まあ、全く信じられないけど、でもそれなら、二人おかしな人がいたわね。」

宗司「えっ？」

もしかして、そのどちらかがカズオか？

姫「かなり年輩の男だった。おじいさんって言えるくらいの。」

なるほど、それは怪しい。

でも、俺ならおじいさんになっても、姫なら興味あるけどな。

姫「で、もう一人が、美奈斗さんかな。女性だったってただけけど。」

女性か。

確かに、ナンパ目的なら、女性が聞いてくるのはおかしい。

他よりは可能性として高い事も確か。

宗司「その人達、誰だかわかるか？」

姫「わかるわよ。一人は扇グループの総帥だし、美奈斗さんは、次期総理大臣最有力候補の、桜井豊のお孫さんだもん。」

宗司「ええ！！」

驚きと考えが錯綜し、しばらく俺はフリーズした。

絶望と希望

一夜明けて、姫にはもう、魔女ッ子に関する記憶は残っていないだろう。

それにしても、昨日は驚きだった。

カズオの最有力候補が、財界のトップと、政界トップの孫なんだから。

どちらがカズオでも、なんとなく納得がいく。

いや、しかし待てよ？

そんな権力者が、更に上が欲しいか？

いや、前総理を殺した事から、美奈斗さんは凄く怪しい。

自分のおじいさんを総理にする為だと考えれば、動機は十分。

しかし、そんな事の為に殺人するか？

桜井豊なら、どうせ待っていれば、いずれは総理になっただろう。

わからねえ。

一応、それ以外にも声をかけてきた人を、覚えている限り聞いておいが、どれもピンとこない。

豊内自動車の社長の息子、豊内孝。

衆議院議員で、与党自々党の山下辰巳。

ベンチャー企業ネットバリューサイトの副社長 野呂誠。

どれもナンパ目的に見える。

しかし、この5人の中の関係者を含めれば、おそらくカズオが存在するような気がする。

とりあえず俺は、いつもの日課を実行する事にする。

昨日は夜も遅かったから、自分の未来日記は更新していない。

未来日記に繋いだ。

「逃げる事ができたか。しかし、もうまもなく、魔女を持つお前を消せる。」

未来日記の最後に、そう書かれていた。

俺は震えた。

心臓がドキドキした。

どこまでばれているんだろう。

不安だ。

こんな事を面と向かって言われたら、それがかりに確信を持たずに言われた事だとしても、俺の動揺から、俺が魔女を持つものだとばれるだろう。

ネットでよかった。

俺はブラウザをとじた。

昨日の参加者は、1000人ほどだと聞いていた。

その参加者の関係者に、俺が存在する事は、最低限ばれただろう。

きっとこの後、ひとりずつ探りを入れるに違いない。

そして、いずればれる。

それはそう遠くないだろう。

何故なら、カズオ自らそれぞれの家を訪れば、会えない俺達は必ず拒絶しあう。

それが起こった場所にこそ、俺がいるのだから。

実家に戻るか？

いや、華ちゃんと未来ちゃんがいる限り、それはできない。

なるべく時間切れ勝利が良かったが、もうこれで完全に不可能になったな。

それは、俺がカズオを殺さなければならないという事でもある。

俺が先に見つけて、警察になんとかしてもらおう手も、先に見つける事もさることながら、警察にどうこうできるカズオではないだろう。

俺は平静ではいられなかった。

今日の夜の日記に、俺は一か八かで、カズオだと怪しまれる人物の名前を書いた。

昨日聞いた5人に、後5人、俺が動機をでっち上げることができそうな人物の名前を。

こんな事を書いたら、関係無い人にも迷惑がかかるが、俺は怖くて焦っていた。

しかし次の日、これがきっかけで急展開する事となる。

翌日、夜のニュース番組では、俺が名前を記した人物の何人かがテレビ出演してた。

新未来日記に名前が出た事を聞かれている。

俺のサイト、新未来日記も、かなりの影響力を持っている事がわかる。

正直、関係ない人も呼ばれている訳で罪悪感も有るが、命に関わる事なので仕方がない。

そして夜には、ネットバリューサイトの社長春野あやめが、色々な人から責められていた。

テレビの人A「最近、子会社のネットバリューサイト証券が、未来日記の予告どおりに株取引を行い、かなりの利益をだしている件が怪しまれています。」

あやめ「私は、あのサイトを前から見ていましたから、参考にしてた事は否定しません。」

テレビの人A「では、あなたが未来日記管理者では無いと？」

あやめ「当たり前です。」

少し怒っているようだ。

しかし未来日記を参考にして、株取引で儲けたとなると、怪しまれるのも無理はない。

今から俺がテレビ局に行って、拒絶反応がでるかどうかが試せれば、この人がカズオなのかどうかかわかる。

いくか？

ダメだ。

あまりにも危険すぎる。

それに、俺はこの人がカズオだとは思えない。

何故なら、そんなあからさまに、証拠になりそうな事をするのかって事。

そしてもうひとつ、パーティの出席者名簿には、名前が無かった事。

俺が怪しいと思って書いたのは、副社長の方だ。

もしかしたら、会場には来ていたかもしれないが。

俺は立ち上がり、姫の部屋へと向かった。

部屋の前につくと、俺は一息ついてから軽くドアをノックした。

姫「はい。どうぞ。」

俺は姫の部屋に入った。

宗司「ちょっとだけ聞きたい事があるんだけど、いいかな？」

姫「いいよ。座ったら？」

宗司「いや、すぐだから。」

姫は暇をもてあましていたのか、少し残念そうだった。

姫「で、なにかな？」

宗司「パーティに、春野あやめさんて、来てたかな？」

姫「ああ、あの綺麗な人・・・もしかして・・・」

宗司「いや、今テレビに出てたから、ちょっと気になっただけで・・・」

俺は何いいわけしているんだろう？

姫「来てたと思うけど。チラッと見た気がしたから。」

えっ？

来ていた？

名簿にないのに？

いや、用心して書いてなかったのか？

姫「どうかしたの？」

宗司「いや、ありがとう。じゃあ戻るよ。おやすみ。」

姫「おやすみ。」

俺は姫の部屋を出た。

もし、あのあやめさんが、不用意に動いてしまっていたなら、これはかなり可能性がある。

しかし、俺は前に否定していたはずだ。

株取引はフェイクだと。

俺は、ずっとテレビをみていた。

今度は違うテレビ局に呼ばれていた。

宗司「やっぱり違う気がするんだけど。」

みかん「まあ、魔女っ子は見えないし、わからないのさ。」

宗司「みかんだけがテレビ局に行っても、意味ないよな。」

みかん「見えないから、なんとも言えないのさ。」

．．．

それ使えないか？

見えないんだから、あやめさんの自宅に忍び込んで、魔女っ子と話すところを見れば。

まあ、独り言に見えるんだけど。

みかん「おお！それなら調べられるのさ。」

宗司「よし、それでい．．．」

俺はそれでいこうと言おうとした。

でも、それは必要無かった。

テレビに出ているあやめさん。

何も無い、肩の辺りに話しかけるそぶり。

そして、丁度俺がみかんをなでるような感じで、その辺りを指が行き来していた。

みかん「間違いないのさ。」

宗司「だな。」

間違いない。

春野あやめが、カズオだ。

俺は確信した。

宗司「まさかカズオが女性だったとはな。」

俺は一縷の望みを警察にたくし、新未来日記に、「未来日記管理者は、春野あやめ。」と書いて、俺は眠りについた。

逃走

朝の未来日記チェック、昨日の更新は無かった。

当然だ。

春野あやめは、昨日深夜のニュースにまででていたんだから。

それでも一応、自分の未来日記もチェックする。

宗司「ん？」

俺は、コメント覧に、春野あやめの名前を見つけた。

どうせ悪戯だろうとは思ったが、一応内容は確認する。

「私は、未来日記管理者ではありません。私がかもし拘留されたとしても、未来日記は必ず更新される事でしょう。」

なんだろう。

どうしても、本人が書いたとしか思えない。

しかし、あやめさんが魔女を持つ者である事は、おそらく間違いない。

一応IPアドレスはチェックしておく。

大手日本のプロバイダのものだ。

これを調べれば、調べる事ができれば、書いた人は証明できる。

自分では調べるのは危険だから、まあサイトにアップするか。

宗司「わからんな。昨日は未来日記が更新されていない。しかし、コメントは、深夜ではあるが、一応書いてある。」

とにかく、今は警察が頑張っていて、あやめさんを殺人容疑で捕まえてくれるのが一番良い。

その間に、俺達が魔女っ子をレベル3にするのが一番の解決方法だ。

ただし、他に魔女っ子がこの地球にいない事が条件になるのだろうが。

俺は人殺しをせずに済むかもしれない。

プルルルルルル！

携帯が鳴った。

俺は携帯を手に取り、ディスプレイを見た。

未来ちゃんだ。

今は授業中じゃないのだろうか？

俺は電話に出た。

未来「た、大変です。華ちゃんが！」

どういう事だ？

華ちゃんが大変？

宗司「お、おちつけ。ゆっくり話して。」

俺は自分自身にも言い聞かせる。

未来「えっと、華ちゃんが、カズオと接近して、拒絶反応が出たって。だから、無事帰る未来日記を創造したんだけど、答えが出なくて。」

俺は携帯を持って、慌てて部屋を飛び出した。

後ろでは、みかんが目覚めて何か言っていたが、ゆっくりしてられない。

宗司「とりあえず、別のところだとどうだ？たとえば、渋谷駅前に行く日記とか。」

未来「やってみる。」

俺は話しながら、河崎邸のお手伝いさんに話しかける。

宗司「華ちゃんを迎えに行くから、車の鍵、かしてもらえませんか！」

お手伝いさん「え、ええ、かまいませんよ。」

あっさりと鍵を渡してくれた。

俺は駐車場へと向かう。

未来「あ、大丈夫です。渋谷ならいけます。」

きっとまもなく、いや、既にかもしれないが、河崎邸はマークされている。

俺は車に乗り込むと、エンジンをかける。

運転は2年ぶり、免許を取ってから、一度も乗ってないからな。

少し怖いけど、俺は車を走らせた。

目的地は渋谷。

ナビがついているのは助かった。

本当は、電話しながらの運転はいけないが、今はそんな事を言ってもらえない。

宗司「渋谷のバスターミナルのところで待ってる。いつも河崎邸に止めてある、あの黒い車を探してくれ。」

未来「う、うん。わかった。」

それにしても、何故俺でなく、華ちゃんが・・・

宗司「あっ！」

パーティの名簿。

あの中に、華ちゃんの名前があったんだ。

ボンミスだ。

俺は帰ったんだから、あの会場にいない参加者、それが怪しまれるのは当然じゃないか。

渋谷について。

未来ちゃんと華ちゃんは、まだきていない。

もしくは華ちゃんだけだろうか？

待ってる時間がもどかしい。

華ちゃんが、ココに無事来る事を、頭の中で書いてみる。

・・・

どうやら、俺は待つしかないようだ。

少し安心した。

ココにはこれる。

問題はその後どうするか。

河崎邸には戻れない。

関連会社のホテルもダメだろう。

俺の家か、未来ちゃんの家。

どちらかになるか。

いや、ダメだ。

きっと調べられる。

どこか、どこか無いか？

気がつくと、向こうから華ちゃんと未来ちゃんが走ってきていた。

俺は車から手を出して呼ぶ。

後ろのドアを開けて、二人を招き入れた。

宗司「よく頑張った。」

俺はドアを閉めると、すぐに車を出す。

宗司「未来ちゃん、俺達が行く、一番いい場所を探してくれないか？」

未来「はあはあ。うん、わ、わかったよ。」

未来ちゃんも華ちゃんもかなり疲れているようだ。

しかし、ボサッともしてられない。

宗司「頼む。」

俺はなるべく都心から離れる方向で、車を走らせた。

華ちゃんは震えていた。
ちゃんと守ってあげられない自分が悔しかった。

埼玉辺りで車は乗り捨て、そこから電車で横浜。
ついたのは、未来ちゃんの亡き父の妹の家。
双葉昌子の家は、亡き両親の家でもあった。
俺達は、快く受け入れられた。

昌子「未来ちゃんのお友達なら、大歓迎よ。」
そう言ってくれた。
でも、家はそれほど広くはないし、部屋が多いわけでも無い。
PCも無かった。
今日の更新はできない。
河崎邸はどうなっているだろう。
さっき一応連絡は入れた。
華ちゃんの携帯で。
しばらく留守にする事と、俺と未来ちゃんの事は話さないように言っておいた。
後は、河崎邸のセキュリティを信じるしかない。
俺のPCも電源が入れっぱなしだったから、電源は落として貰ったけど、履歴は残ってるだろうな。
あとはみかんが気になる。
どうしてるだろう。
寂しがってないだろうか。
俺はいつの間にか眠っていた。

探り合い

双葉家で朝を迎えた。

俺は携帯で、とりあえず未来日記をチェック。

「新未来日記管理者は、河崎華。」そう書かれていた。

とりあえず、殺すとかそんな事は書いていなかったから、とりあえず助かったが、どんどん騒ぎが大きくなる。

死人は、皆川元総理だけだが、国のトップが殺されたのだ。

騒ぎがこれくらいあっても当然だ。

華「携帯で、チェックしてもお、大丈夫なのお〜？」

宗司「ああ、今はアクセスする人が馬鹿みたいに多いだろうから、特定なんてできないさ。」

だけど、新未来日記の更新は、携帯では危険だ。

カズオにはばれてるけど、証拠は何もないのだ。

宗司「とりあえず、しばらくはココが安全だから、ココにおいて貰おう。」

華「うん。」

昨日の事を思い出したのか、少し震えていた。

抱きしめてあげれば良いんだけど、俺はチキンだからできなかった。

宗司「俺は、ネットカフェに行ってくる。」

もう、夜に更新だとか、そんな余裕はない。

華「うん。」

宗司「未来ちゃんは、まだ寝てるのかな？」

華「疲れてるみたいだよお。」

昨日一番頑張っていたからな。

あの、痴漢にあって脅えていた未来ちゃんとは思えなかった。

変わったんだな。

強くなった、そう思った。

ネットカフェで新未来日記に繋がると、俺はまず、昨日メモしたあやめさんのIPアドレスを公開する。こうしておけば、昨日の書き込みが、本人かどうか、誰かが調べてくれるだろう。

今更調べる意味があるかどうかはわからないけど。

ネットカフェ内のテレビでも、未来日記関連のニュースが流れていた。

河崎華が姿を消した事が、今日のメインニュース。

どのテレビも、華ちゃんが新未来日記の管理者なのかと騒いでいて、自宅で隠れているってのがおおかたの見方だ。

あやめさんも、今日はテレビにはでていない。

自宅前からの中継が流れていて、アナウンサーが自宅にこもっているとか言っていた。

なかなかの豪邸。

河崎邸ほどではないけど。

宗司「って、ええ！！」

俺はネットカフェで、大きな声を出してしまった。

個室っぽくなってるから、他からの視線は見えないけれど、なんだかプレッシャーを感じる。

って、そんな事はどうでもいいのだ。

テレビには春野邸が映っているのだけど、その玄関辺りを、みかんが飛んでいた。

みかん「宗司ー！何処なのだぁー！」

半ベそをかいている。

こんな時に、あまり出歩くのは危険だけど、迎えに行くしかあるまい。
春野邸の場所を検索し、俺はログを消してから、ネットカフェを出た。
未来ちゃんには、一応無事に帰れるように、未来日記を頼む。

さて、俺も日記を創造する。

みかんと無事出会うシナリオ。

これは善意だから簡単だ。

簡単に春野邸について、俺はみかんを見つけた。

みかん「おー！さびしかったのだぁー！！」

みかんが俺の顔にひっついてきた。

俺は一応周りを警戒しつつ、みかんをなでた。

どうしておまえこんな所にいるんだ。

みかん「春野あやめを調べていたのさ。」

ほう、それでどうだった？

みかん「全然、魔女っ子と話してる事がないのさ。」

どういう事だろう？

もしかして、本当に魔女っ子のご主人様ではない？

みかん「そうかもしれないのさ。」

でも、今の俺達のように話す事も可能だよな。

みかん「なら、近づいてみるのさ。拒絶反応がでるか試すのさ。今家にいるのさ。」
うむ。

確かに試せばわかるけど、本当だったらやばくね？

みかん「野次馬が多いから、大丈夫なのさ。」

まあ、未来ちゃんに、無事帰る事は頼んである。

試すか？

みかん「男は度胸なのさ。」

みかんが後頭部を蹴った。

別に対したダメージも力も無かったけど、俺は少し触られた程度の蹴りに身を任せ、前へと進んだ。

河崎邸の周りは、何処にも人がいた。

テレビカメラを持った局の人や、ICレコーダを持った新聞記者達。

壁際を一周したが、特に抵抗はない。

距離的には、どれくらい近づくと拒絶反応がでるのだろうか？

みかん「わからないけど、50mから100mくらい？目視できるかどうか基本かも、なのさ。」
てことは、抵抗があってもおかしく無いはずだ。

なのに抵抗がないとなると、やはりあやめさんは、カズオじゃなかったのか？

みかん、ちょっとどの辺りにいるのか、見てきてくれ。

みかん「あいあいさー！」

みかんは飛んでいった。

みかんがいなくなると、俺は急に不安になった。

やはりココにいるのはどう考えても危険だから。

しばらくして、みかんが戻ってきた。

かなりホッとした。

どうだった？

みかん「いたのさ。裏側の庭、椅子に座ってるのさ。」

よし言ってみよう。

裏にも人が何人かいる。

でも、俺は確認しなければならない。

カズオで無いのに、殺す事になってしまっは、自分が許せないだろうから。

俺は塀に向かって走り、駆け上った。

有刺鉄線もあるし、越えるつもりはない。

ただ、一目見ることができれば・・・

みかん「見えたのだ！」

見えた。

会う事ができた。

春野あやめは、カズオでは無かった。

俺は、怪しまれないよう、ゆっくりとその場から離れる。

みかん「塀を駆け上がったから、それは無理なのさ。」

周りの人たちが、不信感バリバリで俺を見ていた。

宗司「いやぁ～取材したいんだけど、塀を越えちゃダメだし、どうするかなぁ～」

俺はそんな独り言を言いながら、その場を離れた。

とりあえず春野邸からは離れたが、どうやら一人、誰かにつけられていた。

みかん「どうするのさ？」

どうするかな。

このまま帰っては、やばい事は確かだ。

かといって、逃げたりしたら完全に怪しまれる。

俺は怪しまれずに尾行を煙に巻く日記を創造してみた。

・・・

大丈夫かな？

こんな事して。

みかん「できそうなのか？」

まあ、簡単に出来そうだけど、出来そうにないんだよね？

みかん「よくわからんけど、できるならやるのさ。」

ああ・・・

俺は麴町駅で降りた。

このすぐ近くに、とある雑誌社がある。

俺はどうしようと、その建物に入っていった。

尾行してる人も、俺が取材がしたくてあそこにいたと思えば、尾行をやめるという事だろうけど、本当に大丈夫か？

俺は堂々と受付の人に話す。

宗司「えっと山田太郎ともうしますけど、月刊スクープ7の担当の方に会いたいのですけど。」

どうだ？

まだいるか？

みかん「まだこっちを見てるのさ。」

ちっ！

受付「少々お待ちください。」

内線で呼び出しているようだ。

受付「川本さんは？はい。えっと、山田太郎さんって、えっと・・・」

宗司「フリーの記者です。」

まだか？

みかん「まだいるのさ。」

くそっ！

受付「フリー記者の、はい、はい。わかりました。」

受付の女の人が、内線電話の受話器を置いた。

受付「えっと、こちらでお待ちください。もうすぐ来ますので。」

ええー！そんな簡単に会ってくれるのお！

みかん「まだいるのさ。」

俺は覚悟を決めた。

結局、担当の川本さんと、20分も話してしまった。

無い事無い事いっぱい喋ったら、必至にメモしていた。

でも、実は本当の事も話しておいた。

春野あやめは、未来日記管理者では無いと。

あくまで俺の予想としてだけど。

尾行がいなくなった事を確認して、俺達は双葉家に戻った。

一日会わなかつただけのゆず達は、みかんと再会を涙を流して喜んでた。

俺も、少しの涙をこらえた。

久しぶりの帰宅

次の日の朝には、早速、新未来日記に、「春野あやめは未来日記の管理者では無かった。」と書いておいた。

夕方には、春野邸からの中継は無くなっていた。

しかし、俺は気になる事がある。

テレビに出ていた時のあの仕草。

あれはどう考えても、魔女っ子に対するものだ。

あんな事をわざわざする人はいない。

俺の予想では、誰かに、ああするように頼まれて、それをそのまま実行したって事だろう。

あやめさんの会社は、未来日記によって、大きな利益を上げた事を否定していなかった。

あのサイトが有名になる前から知っていたって事は、誰かに教えて貰った可能性が高い。

それがカズオ本人で、儲けさせる見返りに、カズオの計画に協力する。

そんな風に考える事は、ありえないだろうか？

いや、それはなんだか違う気がする。

あのあやめさんって人は、テレビで見る限り、そんな事をするような感じがしない。

金持ちは、更なる金を求めるものだと、俺は思っていた。

そう考えれば、あり得るのだけれど。

とにかく、カズオとなんらかのつながりは有りそうだ。

明日の日記には、「未来日記管理者は、春野あやめの知り合いである。」と書くでしょう。

そして次の日、朝一番のニュース、俺は映し出される映像を見て、恐怖した。

まずは、今日の2時頃に書かれた、未来日記。

「本日、春野あやめは、命を落とす事になる。」

そう書かれていた。

そして、今テレビのニュースでは、炎が既に沈下して、骨組みが一部だけ残っている春野邸が映っていた。

放火と断定して調査しているとか、死体がみつかったとか、そんな事をアナウンサーが言っている。

俺達も、きっと見つかったらこうなるんだ。

ニュースと一緒にみていた華ちゃんと未来ちゃんも、顔が少し青くなっているように見えた。

もう、もたもたしてられない。

次は俺達か。

それとも、河崎家へ何かしらのアクションがあるかもしれない。

待っているだけではダメだ。

俺は携帯電話を手に取った。

みかん「どこにかけるのさ？」

宗司「もう、ゆっくりはしてられない。俺らからも動かないと。」

俺は姫に電話した。

姫「もしもし。」

すぐにでてくれた。

宗司「今、大丈夫か？」

姫「起きたばかりよ。」

宗司「そっか。ニュースは見たか？」

姫「だから起きたばかりよ。」

向こうで、テレビを付ける音がした。

姫「何これ？あやめさんが・・・」

宗司「俺は、ある理由で、この犯人を捜したいと思っている。だから、少し協力してもらいたい。」

姫「もしかして、知り合いだったとか？」

宗司「まあ、そんなところだ。だから、あやめさんと親しかった人を調べてほしいんだ。」

俺は、あやめさんの交友関係を、姫の力で調べてもらう事にした。

正確には、金の力って事になるのだろうか。

姫「かまわないけど、ホントに今どこにいるの？華は？」

宗司「ああ大丈夫だ。場所は言えない。ああ～後、なんの事だかわからないと思うけど、とにかく河崎邸も狙われるかもしれないから、十分注意してほしい。」

姫「なんだかわからないけど・・・とにかく分かったわ。」

宗司「ありがとう。」

華は狙われている。

河崎邸でかくまってる可能性も考えられるから、今回のような放火や、それ以上で攻撃される可能性もある。

最後に少し、華ちゃんに電話を替わって、電話を切った。

さて、俺は一度、実家に帰る必要があるな。

ほんの数ヶ月前まで、死にたいと思っていた俺は、ある物を作っていた。

死ぬための道具。

結局怖くて使えなかったけど、まさか本当に使う事になるとはね。

苦笑いがもれた。

久しぶりの実家だ。

姫に確認したところによると、俺に関する事を漏らしたりするような事は、無かったらしい。

だから、おそらく俺が実家に戻る事に危険は無いはずだ。

有るとするなら、親からの嫌み攻撃。

俺は一人、苦笑いしながら鍵を開けて、久しぶりの我が家の門をくぐった。

宗司「ただいまー！」

いつもどおりの帰宅。

大丈夫、完璧に普通だ。

・・・

誰もいなかった。

テーブルには、一枚の手紙。

「しばらく旅行に行ってくるから、帰ってきてても何もないよ。ははははは！」

ま、まあ、これくらいの方が、良いよな？

みかん「完璧に捨てられてるのさ。」

俺はトボトボと自室に入った。

懐かしく感じる。

死ぬ事だけを考えていた部屋。

ココから出て、今は生きる事だけを考えている。

人間変われば変わるものだ。

未来ちゃんだけではないんだ。

俺は押入をあけて、天井の板を外した。

ひとつのナップサック。

この中に、死ぬために作った・・・爆弾がある。

テストしたわけではないから、爆発するかどうかはわからない。

ネットサイトで調べたとおり作っただけだ。

俺はナップサックを背負った。

少し重い。

俺は部屋をそのままに、家を出た。

後で、鍵を閉めたかどうか不安になったが、今更戻る気にはなれなかった。

双葉家に戻ると、丁度姫から電話がかかってきた。

宗司「はい。」

姫「調べて欲しい事、一応調べたよ。仲が良かった人だよ。それがあまりいなかったみたい。」

宗司「そうなのか？美人だし、友達とか多そうだけど。」

姫「金持ちって、本当にお金抜きで仲良くなれる人って、少ないんだよ。」

これが、金持ちの辛い部分なのだろうか？

寄ってくる人は、みんな金目当て。

友達も、もしかしたら、金の切れ目が縁の切れ目みたいな感覚だったんだろうか。

華ちゃんも、ココに来てから、誰かに連絡してる事は全くない。

未来ちゃんは、結構友達にメールしてるようだけど。

学校ずっと休んでるから、友達も心配してくれているんだ。

宗司「で、何人かはいたんだよな？」

姫「うん。なんか婚約してるとか言ってた人が一人。」

これだ。

俺は思った。

なんとなくだけど、あやめさんは、金の為に頑張る人には見えなかった。

それなのに、これだけ会社を大きくして、金持ちになったのは、きっとその人がそうしろって言ったから。

姫「えっとね。現総理の桜井豊の孫、桜井海里って人。美奈斗さんのお兄さんだね。」

宗司「えっ！その人、パーティには来てたか？」

姫「うん。美奈斗さんと一緒にいたよ。」

間違いない。

絶対この人だ。

俺は確信した。

電話を切ると、荷物は一旦おいて、ネットカフェに向かう。

新未来日記に、「未来日記管理者は、桜井海里。そろそろ終わりにしましょう。」そう書いた。

後悔と恐怖

俺は姫に、桜井海里の行動、予定を調べて欲しいと頼んだ。
こっちが調べている事がばれないようにと、くれぐれも念をおして。
相手は総理大臣の孫、しかも、調べたらいくつかの会社の取締役を兼任している。
金も権力もおそらくは申し分ない。
そしてレベル3の力。
河崎の、いや、三輪の力でも、相手にならないくらい強大な力。
真っ向勝負では勝てない。
でも、相手は色々な予定のある身、立場のある身だから、どうしてもやらなくてはならない事がある。
しかし、こちらの華ちゃんは、学校を休んでいる以上、ずっと隠れる事も可能。
更には3人いるんだ。
互角以上の勝負ができるはずだ。
電話が鳴った。

姫「情報だけど、私が調べるまでもないわよ。テレビ見れば。」

俺は、姫の言葉にテレビを付けた。

今度は、桜井邸に、テレビカメラと記者が押し寄せている。

河崎邸も時々中継が入る。

未来日記の桜井海里と、新未来日記の河崎華、いよいよ対決か？みたいなノリだ。

姫「私ももう外にでれないわよ。」

宗司「もうすぐ終わるから、それまでは自重してほしい。」

姫「宗司さんが何してるのか、華が何してるのか知らないけれど、くれぐれも危険な事はしないでね。」

そう言われても、危険は向こうからやってくるんだけどね。

姫は、俺たちが未来日記になんらかの関係がある事に、気が付いているのだろう、漠然とそう思った。

宗司「ああ。」

俺は危険でもやる覚悟を決めていた。

とにかく、桜井海里は、ずっと自宅にこもっているらしい。

しかし本当にそうだろうか？

華ちゃんだって、実際はココにいるんだ。

一応未来日記を試してみる価値はある。

宗司「未来ちゃん、自宅に桜井海里がいるらしい。俺とココに遠隔操作できる爆弾があると思って、未来を見て欲しい。俺は桜井海里をやれるか？」

正直、人を殺す算段を未来ちゃんにやらせるのは辛い。

でも、俺よりレベルが高いから、頼るしか無かった。

未来「ダメだ。絶対に無理そう。」

宗司「俺の命を考えなくても？」

未来「えっ？！それはダメだよ。」

宗司「いや、参考にするだけだから、とりあえず見てみて。」

いや、本当は、俺の命でなんとかなるなら、それでもかまわないと思ってる。

だって、このまま放っておいたら、華ちゃんは絶対殺される。

姫だって、危ないかもしれない。

未来ちゃんだって、いずれそうなるだろう。

みかん「だ、ダメなのだ・・・」

みかんが小さな声で泣いていた。

未来「ダメだ。どうしても、見えないよ。」

宗司「そっか。」

これは、やはり桜井邸にいないのではないだろうか。

夜とかに潜入できれば、爆弾セット出来そうだけど。

爆弾が爆発しない？

いや、爆発するはずだ。

俺が脳内日記で、爆弾が爆発したと創造したら、簡単な手順でそこまでできていた。

あっ！そうか。

俺は再び脳内で日記を創造する。

「桜井邸で、桜井海里がいる事を確認できた。」と。

ダメだ。

全く、話しにならない。

いない者を、いるなんて事は不可能だからか。

もしかしたら、絶対に確認できないように潜んでいるのかもしれないけど、可能性が高いのは、いない

。

だったら何処に？

結局この日は、何もする事無く終えた。

次の日のニュース、信じられないくらい静かだ。

桜井邸を映す事も、河崎邸を映す事も無かった。

未来日記に関するニュースはどのチャンネルも放送していない。

どういう事だ？

圧力をかけたのか？

すると未来日記に関するニュースが流れてきた。

たまたま時間があわなかつただけのようだ。

ただ、盛り上がりは無かったが。

アナ「未来日記ですが、新未来日記を含めて、全て尾北宗司、二十歳が書いた事が判明しました。」

宗司「えっ！」

な、何故？

アナ「ブログサイトには、本人自らのコメントが書かれています。」

未来日記は、「皆さん、そろそろ私も疲れました。私の名前は尾北宗司、二十歳です。新未来日記も私が書いたものです。近々、私は死ぬ事になるでしょう。」

俺は、震えていた。

呼吸も、安定しない。

心臓もちゃんと動いているように感じなかった。

アナ「これを証明する映像があります。」

ネットカフェで、俺が新未来日記に書き込みしている映像だった。

宗司「あのネットカフェ、桜井の息のかかった場所だったんだ・・・」

やはり、この世の中、金と力が全てなんだ。

俺は、何をしようとしてたんだろう。

俺達の方が有利。

馬鹿な事を。

宗司「大人しく、最初から何もしなければ良かったんだ。」

華「駄目だよお～。まだ諦めちゃダメだよお～」

未来「は、はい。諦めてはダメです。まだ、ココがばれたわけではありませんよ。」

みんな・・・

そうだな。

ココまでやってしまったんだ。

最後まで戦う。

そう思った時、電話がかかってきた。

携帯のディスプレイを確認すると、姫からだった。

宗司「もしもし。」

？「あー。君が、尾北君かな？未来日記だけど。」

宗司「えっ？」

姫の携帯から、桜井？

海里「おたくらのおかげで、俺の計画が少し狂っちゃったよ。責任とってもらうからね。」

宗司「な、何を？」

ダメだ、俺はチキンだ。

怖くてちゃんと話す事もできない。

海里「まあ、大した誤差ではないけどね。あやめを殺さなくちゃいけなくなったのと、河崎姫さんを、誘拐しなくちゃいけなくなったくらいだ。」

宗司「えっ？姫を誘拐？」

華「えっ！？」

未来「そ、そんな・・・」

海里「決着をつけよう。来なければ、河崎姫さんは死んでもらう。ああ、華さんの方も一緒に来るように。」

宗司「ちょっとまでよ。」

海里「場所と時間は・・・」

場所を告げた後、電話はすぐに切れていた。

こちらからかけ直しても、もうつながらなかった。

どうして、俺と姫が繋がっている事が、どうして華と繋がっている事がばれたのか。

桜井海里の目的はなんだったのか。

全ては今更だけど、なんとなく魔女っ子だけで調べさせたのかな？

そして桜井も、俺と同じで、今の世の中が嫌だったのかな？

なんとなくそう思った。

決着そして・・・

姫が誘拐された事は、完全に俺の失敗だ。
姫が危険な事は分かっていた。
けどどこかで、魔女っ子との契約者ではないから、安全だと思っていたのだ。
俺は、必ず助けると心に誓っていた。

夜中、俺は待ち合わせ場所にいた。
まだ、待ち合わせ時間ではないが、俺は来なくてはならなかった。
先日実家から持ち帰ったナップサックを持って。
待ち合わせ場所は、とある川沿いの道にある丁字路。
その丁字路のマンホールの中に俺はいた。
そこに今爆弾を仕掛けている。
明日、これを使う事になるかどうかは、作戦がうまくいくかどうかにかかっている。
警察に連絡はしていない。
どうせ奴らは、権力者の力にはきっと勝てない。
証拠が無ければ、俺の言葉より、総理大臣の言葉を信じるだろう。
これは仕方の無い事だ。

宗司「上司の命令は、絶対だからな。」

俺は苦笑いした。
爆弾をセットすると俺は一旦双葉家に戻る。
待ち合わせは今日の夜だから、まだまだ時間がある。
待ち合わせ場所は真っ暗な場所で、外灯も無い。
この場所を選んだのは、なるべく俺達と近づける場所だからだろう。
目視できる距離は、5mくらいかもしれない。
今日は新月だし、天気は曇りらしい。
俺を銃で撃とうとするのか、それとも、他の方法か。
人気の無い場所のようだから、殺しがあっても目撃者なんて、絶対になさそうな場所だ。
俺達は、作戦をもう一度確認する。
未来日記では、それぞれがそれぞれの方法しか記さないから、作戦は俺の自作だ。
待ち合わせ場所に行けば、俺と華ちゃんは、生き残る術が無い。
全く勝ち目はなさそうだ。
おそらく相手も、勝ちを確信しているだろう。
でも、こちらは3人いるんだ。
3人を相手にした未来日記なんて、過去に無かったんだ。
勝てる可能性はあるはず。

夕方、俺達は出かける。
待ち合わせ場所は遠いから、そろそろ出ないといけない。
車は無い。
俺達は電車を乗りついで、目的地に行く。
一応念には念をいれて、目的地とは違う駅で降りて、そこから歩く。
もう行動はバラバラだ。
携帯のGPS機能を利用して、作戦の場所へと行って貰う。
待ち合わせ場所に立つのは、俺だけだ。

華ちゃんもつれてくるように言っていたけど、別の場所に待機。

おそらくそれくらいは、相手もわかっているだろう。

俺の下には今爆弾がある。

相手と接触できれば、一緒に死んでも良いけど、俺達は接触はできない。

100m先に、車が止まった。

少し苦しい。

しかし、車のライトが消えると、苦しさも消えた。

見えない。

先ほどまでぼつぼつとあった少ない建物からの光も消えていた。

完璧な闇。

桜井が、このあたりを停電にでもしたのだろうか。

闇の中なら、見えなければ、かなりの所まで接近できる事は确实だ。

遠くから、声が聞こえた。

海里「華さんはどうした？まあ、わかっていた事だけだな。近くにいるんだろ？」

どうやら、声は伝わるし、喋る事もできそうだ。

しかし少し苦しい。

宗司「ああ。それより姫はどうした？いるのか？」

海里「もちろんだ。横にいる。ほら、何か言ってやれ。」

姫「宗司！逃げて。こいつ銃を持ってる。あなた達殺したら、どうせ私も殺すんだから。」
わかっている。

でも、見捨てる事はできないし、ココで逃げても結果は同じなんだ。

姫「それに、こいつ赤外線カメラ付ける！暗闇でも見えるよ。」

そうか。

向こうからはこちらは見えるのか。

魔女っ子の能力でも、そこまでは制限できないのか。

海里「まあ、そういう事だ。今からそっちに行くから、逃げるなよ。」

足音が聞こえる。

二人分。

どうやら、姫も一緒につれてこられているらしい。

これで、車には誰もいないと予想できる。

作戦どおりだ。

未来日記は、基本一人で全て達成されるようにできている。

だから、赤坂見附の総理殺害も、自らそこにいたんだ。

そして、俺と華ちゃんがそれを阻止する場合、何をすれば良かったか。

ただ、桜井海里に近づけば良かった。

俺は、華ちゃんの携帯に合図を送った。

間もなく、海里の苦しむ声が聞こえた。

海里「うあー！な、何を？」

海里の向こう側から、華ちゃんが懐中電灯を持って近づいている。

うっ！俺も苦しくなってきた。

宗司「姫、にげろー！」

俺は叫んだ。

銃声が聞こえた。

大丈夫だろうか？

不安だけど、とっさに創造した範囲では、大丈夫だ。

華「く、くるしいよお〜」

華ちゃんの声が聞こえてきた。

宗司「がんばれ！」

俺は声をかける。

華ちゃんに押される感じで、おそらくは海里がこちらに近づいているはずだ。

横道は未来ちゃんが押さえている。

未来「うーん！」

海里「も、もう一人いたのかぁ！」

かなり近くで声が聞こえる。

俺達3人、苦しさに勝てば、勝てる。

俺は少しずつ下がる。

宗司「川に飛び込んだらどうだ?！」

海里「くう～!こんな事は、未来日記には無かったぞ・・・」

そもそも、3人集まるなんて事を想定してないからな。

俺は爆弾のスイッチを入れた。

後は、マンホールの上に乗れば、爆発する。

華ちゃんはかなり苦しそうだ。

未来ちゃんも、相当苦しいだろう。

俺も意識が飛びそうなくらい苦しい。

それでも、俺が一番楽な位置にいるんだ。

俺が負けるわけにはいかない。

それでも意識がとぶ。

後少し、後少し・・・

消えかけていた意識の中、爆発音が響いた。

その音と、おそらくは桜井海里が自分から離れた事で、苦しさが和らいだのだろう。

俺はしっかりとした意識を取り戻した。

海里「うわー！」

桜井海里の悲鳴の後、何か鈍い音がいくつか聞こえ、苦しさが・・・消えた・・・

俺と華ちゃんは、結局レベル3に上げるのに1年以上かかった。

それでも、みんながレベル3になった時、魔女っ子達とはお別れだ。

俺は、三輪商事で働く事が決定していたが、まだニートだ。

魔女っ子達を送り出してから、働こうと決めていたから。

みかん「働きたくなかっただけなのさ。」

宗司「まあ、そうなんだけど。」

それだけでは無かった。

正当防衛とはいえ、人ひとり殺してしまった俺が、普通に生きていて良いのか?

気持ちの整理をつけるのに時間を要した。

で、みかん曰く、今日でお別れらしい。

みんな、河崎邸に集合していた。

宗司「しかし、未来日記ってさ、結局ほとんど自力で頑張らないといけないし、1年前みたいにうまくいかない事もあるんだよな。」

未来が見えると言っても、そのゴールに向かう可能性の一つが見えるだけってわけだ。

なにかしらの要因で変わる事がある以上、それは未来が見えているわけではない。

1年前、俺達は運命と思われた死を、自分たちの力で切り開き、今こうして生きているんだ。

不可能と思われても、必ず達成する道はあるに違いない。

みかん「じゃあ、最後だけど、笑顔で別れるのだ。」

ゆず「そうね。やっぱり笑ってる方がいいもんね。」

すもも「泣いてへんもん。」

みんなの目には涙があった。

もちろん俺達も。

華「う、う、な、悲しく、う、う～」

未来「み、みなさん、お元気で。」

華ちゃんは相変わらずだけど、未来ちゃんは強くなったなあ。

てか、華ちゃんは、逆に弱くなったって言うか、感情表現が素直になったっていうか。

宗司「じゃあな。また、どこかで会おう。」

みかん「うん。さよならなのさ。」

みかんがそう言うと、3人の魔女ツ子の姿が・・・風に消えた。

・・・

宗司「さて、これから、ニートじゃない俺の人生の始まりだ・・・って、あれ？」

華「うん。変な記憶が、頭に流れ込んで来てる気がするよお～」

未来「私の予想だと、ベタなエンディングになるんじゃないかと。」

未来ちゃんは、とても勘がするどいからなあ～

みかん「お兄ちゃん！」

ゆず「お姉ちゃん！」

すもも「お姉ちゃん！」

・・・

目の前に、人間サイズの魔女ツ子達が見えるのですが、気のせいですか？

人間になったとあって、ベタなオチですか？

もう少し、ニートしようかな。

まだまだ遊びたい気分。

目指す目標が見つかったら、必ずそこに向かう未知はあるのだから。

「未来日記」を読んでくださいます、ありがとうございます。

この作品は、「魔女っ子が出る話を書きたい!」と思った事と、「書いた日記をそのまま実行する話を書きたい!」と思った二つを、同時に実現しようとした作品です。

この頃、書きたいネタが多すぎて、とにかく時間がありませんでした。

そこで、一緒に書くのが一番早いと思って書いたのがこの作品です。

かなり後半端折っていたりしますが、それなりの終わりにはなったと思っています。

同じタイトルのアニメが、2011年に始まりましたが、全く関係ありません。

2007年 秋華

未来日記

<http://p.booklog.jp/book/48825>

著者：秋華

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kitaneko33/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48825>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48825>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.